

言。で、三味線は、碁のを、此處に移したが、玉三と名にしおふ姫御前の大名道具、と手に取つて、お梶が笑ひながら譽めた類少なき逸品である。

ひき手はお梶、仲之町仕込みの冴えた手の、然りながら、大鼓の調とても、其の微妙の奥をきき分くる素養は持たないと言つた、廉三郎は、聲より、音より、唯其の意氣に聞惚れて居るのである。

知らずや、お梶は、看板名を、其の何某の藝妓に譲つた時、

「のしに添へて、藝を一つ譲りませう、のぞみのものを――あ、清元。」

渠は、それ以來未だ嘗て、いかなる席にも、客に清元を聞かせなかつた。

廉三郎は、恠くして慰められつゝ、階下の一室に、半之助と碁の、縁を結ぶのを待つたのである。

「今朝結ひし、島田もいつかもつれ髪、

人に問はれて恥かしや。

笑顔つくれど目にうるむ、

涙を露と夕暮に

野分のあとの女郎花……」

チリリンリン、チレントンシヤン、と彈澄ます、と、さらさらと雪が響いた。

ばた／＼、ばた／＼と跫音聞えて、

「廉さん、兄さん。」と、地の底から呼ぶやうに、二階に響いた、夜更の聲は半之助。

早や、其の階子の中段まで。

「兄さん。」

「おい。」

と應ずる此方を知るべに、半之助が、寢着で、すたく／＼と入る、と見ると、ドウと廉三郎に膝を組んで、息急いで、

「やられた、弄ばれた、玩弄にされた。」

「何、弄んだ。」

唯、三人顔を合せた。炬燵を的に射掛ける如く、白羽の矢の帯、廊下にすつくと碁の姿、まじりと禮儀に手を支いて、

「然やうなら。」

と、立状に、横顔で流眊に掛けて、

「ぼ／＼」と笑ふ、と壇の下口へ衝と行く。

「お待ち。」

と斜めに炬燵を出た、お梶が片膝を丁と打つて屹と呼んだ。

「ご用？」

「藝妓衆、箱を忘れて可いのかい。」

「あ。」

と、つかくと引返して、手に取らうとする、三味線を、取らせず、掬つて取る手も見せず、すつくと立つた。

「場違、生意氣だよ。」と言ふが疾いか、胴を天井に棹を翳した、雪の腕の、片手打に犇と打つ。

笏の背に、三味線はポキリと折れて、根緒が撥くと、糸が刎ねつゝ、ツンと立つて、ぬしを庇

ふやうにお梶を隔てる。

思はず、二人が、両方から、二人の中に割つて入る、廉三郎と半之助の、二人の膝に、弱々と両手を絶つて、島田もいつかもつれ髪、笏は、わななくと震へながら、

「御免なさい、御免なさい、堪忍して下さいまし。半之助様は申すまでもありません。丘さん、貴下に先刻から、心にもない失禮なことを言つて、よく此の口が裂けなかつた。……お一方は太夫さん、お一方も知つて居ます、俳優の似顔や、錦繪より分らない私だつて、偶には人に連れら

れて、上野の繪の會になんぞ行かないこともありません。其の貴方がたがお二人で、お二人で、眞個に私を思つて下さるんなら、どつちへ磨かう、身體は一つ。昔話に聞いて居る、眞間の手兒那をお手本に、死んでなりと、脊筋を二つに裂いてなりと、情を立て見せますのに、いくら果敢ない藝妓だつて、私や、私や、殿方同士串戯に、遣つたり、取つたりなさるんですもの、口惜い、否、情ない、情ない、情ないんですよ、だから復讐に——おかみさん。」と振仰いで縋りつく、笏を膝にしつかと抱き、お梶は、力にしびれて手も萎々と、

「私や、何うせう、笏さん、堪忍おしよ。」と、はつと泣く。

「否、否、貴女の藝をお慕ひ申して、人づてにもお頼み申し、お勝手口から伺つても、教へては下さいません。お師匠さん、今の三味線の御打擲は、私に取つては難有い、お不動様の劍です、骨身を透して嬉しいの、嬉しうございますよ、主婦さん。」

と、仇氣なく、嬰兒が乳に縋るやうに、(野分のあとの女郎花)胸に頬を押し當つる。

感に打たれて、従兄弟同士、男二人が、思はず確と手を取つて、

「勉強しよう。」

「む、お互に。」

と手にじりりと力を籠めた。

黒  
髪

三味線は、廉三郎の親友なる、おなじ學校彫金科出の勇士が、銀に鐵槌打つて繼いで、渚の梶折之、寶生半之助、丘廉三郎繼之、桂家研所持、と壺を入れた。

毎夜、と云つて、一年三百六十五日、缺かさず夜ふかしをするでもないが、久しい間、悪い癖で、夜中二時三時頃までは、寢床に潜りつゝも大概目を覺まして居る。——何うかすると、夜が明けて、其の日の新聞を讀んで、それから寝る事も稀ではない。

番町は邸町で、寂しいと云つても、それでも、まるで人あしの戸外に途絶えるのは……

陽氣にも因るが、たゞ一時か、半時ぐらゐるものである。所謂草木も眠り、流の水も絶えて、屋の棟が下ると言ふ刻限が過ぎると、他土地は知らず、此の邊は牛乳屋が箱車を曳いて通るそれが鐘の音よりも枕に響く、と最う東が白むに程がない。これが不斷の例である。が、其の一時、寂寞と、降るもの、吹くものは別として……ひっそりと静まり返る間に、夜毎に聞える、もの不思議な聲がある。……不思議と云ふのは、偶と心着いてからの事で、其なり聞流せば何、何でもない、冴えた、うら若い、婦人の聲である……夜半二時から三時の、凡そ其の半ばと思ふに、屹と町を通る婦人の聲で、二人かと思ふ夜もあり、三人かと思ふ事もあるが、何を言ふのか、そ

れは聞き取れない。尤も聞取れないくらゐなれば、二人、三人と數へるのさへ、一體は覺束ないので。

唯、わやくゝ入亂れた話聲を……わやくゝ……とまあ記るものの、實は、其では些と騒々しい。はらくゝと、木の葉が揺れるか、花が囁くか、雲霧が摺れ合ふかと思ふ、取留めのない、恚う、散るか、溢れるらしいのが、一度風に乗つて、巴か正に撓据わつて、はつと、其の聲の持ぬしの、二三尺身のまはりへ、ゆらくゝと成つて擴がる……氣勢がして、忽ち消える……と思ふと同時に、

「ほゝゝ。ほゝ。」と、笑つて行く。——  
又此の笑聲が、それはゝゝ顯著く、色に出るばかり鮮明なもので、夜中で、木にも草にも、屋根にも、町にも、濃い薄い隈のほか、月にだつて、何の色彩もない、と思ふ所爲か、分けて暗夜と知つた時などは、颯と、赤い、蒼が口を明けたかとも聞ければ、もみぢを掌から撒くかとも聞える。ちらゝゝ花が咲くやうに思はれるのは……今住む家の向う側に、黒板塀の裡に櫻の樹があるためだ。

「ほゝゝ。」とソレ其處へ……冬は枯葉に灯す紅……春は霞の薄紅梅、月影には紫にして、輝く

黒  
星には碧であらう。  
が、それは笑聲で、もの言ふらしい、今のはらくゝは、樺に、茶に、色がぼやけて、何となく、

ほの煙る。……こゝで氣が着けば、陽炎がものを言ふに似て居るのである。

で、葉にも花にも、長閑な折ふし、静な場合はそれ迄だが、五月雨が續いてじと〜と降りくだつ頃などは、梢へ咲かす地に流れて、垂々と血かなんぞ染むやうだし、凄いのには、風が強く、ひゆう〜と耳を貫くと一齊に来ると、あの、その笑ふホホホホが燈と火の粉に散つて、軒をキリキリと飛びさうで、思はず岸破と刎起きると、其のまゝフツと消えて、やがて、一町ばかり隔つた四辻のあたりで蹺音がカランと響く。また、そんな時に限つて、枕に俯向いて耳を澄まして居ても、遙に夜廻りの拍子木も響かなければ、頼母しかるべき密行の警官の沈んだ靴音もせぬ。取出でて、これは或特別の場合を記憶のまゝに言つたので、はら〜と聲で、さて、笑つて、ツイと遠のいて、蹺音の響くのは、何時の夜も違はぬのである。

考へると、二人か、三人と言ふのは、それは唯思ふだけで、何うも、怪しく夜行する婦人は、唯一人が眞個らしい。とすると……はら〜と散る話聲は、誰に聞かすのか、誰が聞くのか、獨言ではよもあるまい。妙に取れば其の婦人の耳に、——丁ど其の聲のする——空中から、(……)として見れば形も足もないものに成るが、(……)其の婦に、物を言ふのが、洩れて此方の耳に響くかとも疑はれる。

以前、同じ土地の土手に住んだ時は、家の横に細い坂があつた——同じ時刻に、寂しい其の坂

の中途と思ふ處で、聲あつて、必ず笑ふのが殆ど毎夜で、これが約一年半。

現在の番地へ越して來てから、五六年の間、此方が眠つて居ない間に、斷じて聞洩らした覚えはない、丁ど其の堀について、櫻の下を笑つて通る。

私は——と此の話をする男が、更めて言ふのである——

二

密娼が稼ぎの歸途、と思つたのが最初で。やがて、狂人の夜あるき、と言ふ……までで、後に續く分別が一寸ない。一寸どころか、まるで無い。

私も然うだが、誰に話しても、同じ事か、然うでなければ、まさかと言ふ。のつけから嘘にして信じないものも多い。それも尤で、事實とすれば、密娼か、狂人としなければ成らぬのであるが、其のいづれにしても、永い年月を、われらに夜があると齊しく、絶えず打續くと云ふ法はなからう。

夏の頃、門の納涼臺では、またはじまつた星の論で、毎年此の話が出ると、

黒

「一つ驗して見ますか。」

と、宵の内は誰も言ふが、全然信じないのは別として、半信半疑な人々も、つい眞夜中である

が故に聞き漏らす……

「成程聞きましたよ、變ですな。」と云ふのもあつた。けれども、窓を開けたり、門に立つたりして、其の姿を視たほどの好事者は只の一人も無い。

然う言ふ肝心の當人が、今夜こそは、と随分根較べも爲兼ねない氣で、サテ掛るが、出窓の前に居据つて待つても、二階の戸越に立つて居ても、寢床で、うむ、と氣構へても、いざと成ると、我ながら、魂萎え、心疲れて、狸が尻尾で敲くの合圖に、戸をぐわらりと云ふ寸法には行かないので、まだ矢張り、聲だけを聞いて、獨りで不思議に思つて居る。が長いうちには其の不思議にも馴れて、夜鴉が啼くぐらるにしか氣に掛らぬ。但其の聲には色がある。苔が、花が、紅が、紫が、碧がある。流るゝ血がある。ほとばしる火の粉がある。

惟ふに、見た處で、形はあるまい。姿もなからう。氣の迷ひであらう。癖に成つて、現に、私だけが聲を聞くのだと思へば濟む。

冬の小春日の日中、二時頃であつた——夜だと同じ刻限だが——其の白晝に、市ヶ谷見附から士官學校、津の守坂の南通、田町を通つて新宿の大木戸へ出た事がある、杖一本の散策。

崩れた石垣も、魚屋の鮭の切身も、太陽の恩恵には漏れないで、松も、銀杏も、ほかくと暖かつた。車の輪にも光あり、飴屋に集つた小兒等の背には、何うやら美しい羽でも生えさうな陽氣

で、辻便所わきの日溜りには、土方が四五人、仰向けに成つて足を伸ばして居るなど、そして、碧の空には淡く象嵌した晝の月、枯柳には薄く紅がさす。

やがて、坂町の坂の下で、ぶら／＼歩行きの用もなしに、古道具屋——と云つても骨董品ではない、鍋釜ぐるみ、破れ箆、羅紗の紙入、根附の類。然うかと思ふと、ちぎれた具足などを飾つた小店に、陽の線でむら／＼と綺麗な塵埃が舞を舞ふ中を、フト覗くと、壁に建掛けて、疊んだなりの古屏風の上に、國芳のかと思ふ、三枚續きの錦繪があつた。長刀小脇に十二一重緋の袴の瀧夜叉姫。白の振袖、緋縮緬、捌髪で、蜘蛛の魔法は友の若菜姫。自來也の綱手。弓張月の白縫姫。本郷四丁目の名代娘。婀娜に、艶に、凄いのが、まだ四人ばかり面影に立つた。が、續き晝が奥に残つて、店口からは斜に深くてよく見えない。古今名婦傳と題してある。

一粒選の姉さんたち、先方は御存じではないけれども、此方で馴染の深い事は、なか／＼以て、懐中の勘定をしながら、戦々兢兢々でお酌を願ふ藝妓の如き、縁の薄いものではない。

あゝ、うけ口なのが婀娜つぼく眉を擧めた。煤にむせて噓をしさうで打棄つては通られぬ。「御免なさいよ。」

黒 髪

「……はい。」と、やゝあつて、奥から忙しさに出て來たのは四十ばかりの女房で、小さな鬘に毛筋棒を突さして、白い前垂をしめたのは、髪結らしい。

「宿が留守でございますから。」

晝の値段を訊いたのに答へたのが、此で。そして賣りものでは無からう。其の次第は、壁に糊づけに成つて居て、一寸めくれないのだと言ふ。何うだらう、少しくらは損じても、はがしてくれる事は成るまいか、と言ふと、

「唯今、髪を結びかけて居りますから、お生憎様でございますよ、はい。」

其癖、近頃越して來た自分たちより先に、此の繪は壁にあつたなどと饒舌つて、又忙しうに横向の捨會釋。

「お生憎様でございますました。」

や、軒の蜘蛛の巢に日が當ると、繪の白無垢を、はつと浮かせて、若菜姫が雪なす襟から、さらさらと繰出すやうだ。と見ると、赤い半襟でお七が莞爾と其の絲の蔭から笑ふ。……串戲ではない。溝端の落葉がむくくと……あれ串戲ではない。蝦蟆もたがりに動くのを、ひよいと跨いで、此方も苦笑をしたのである。

「皆さん、失禮。」

三

随分長い、あの、だら／＼坂へ上りかゝると、一時人通りに交つて、大木戸から散つて下りる車、荷車の数が多い。曳く其の馬だが、上から來るのを、上りしなの下から見ても正面に打つかる、今にはじめぬ、いや何うも長い面が、坂なぞへの家並の廂を、ぬツと抜いて、蠶が屋根に戦ぐ。

と盲目が十六の時、目が開いて、はじめて此の獸を見て吃驚したやうな心持がして、上つて行く——坂の上角は、眞向に大木戸の火の見階子を見て、彼處は三叉に成つて居る……初めて通つたので——町名は後に覺えたが——一方が四谷永住町、片側が新宿の北裏町で、坂の上にもう一筋牛込の方へ通ふ町があつて、英字のKと云ふ形、古い譬喩が刺叉に成る。家並が町より低く、道が、こんもり高い處へ、坂の上の角は、ト見ると丘の上か、と思ふ……丁ど其の三叉の處に、下から上らうとする私が見て、眞正面の目南に、湯歸りかと思える、のんびりとした姿で、我が家の廊下にもイんだ容子の、繕はない、ありのまゝの、すらりと懐手で、衣服が、と覺えたのは、薄青い處へ、恚う、銀色を帯びた、(無理な相談ではあるが)何か月影を、其のまゝ、日當へ持つて出て、とろ／＼と溶かしたのが、立所に、其の色の霧に成つて纏つた、……とまあ、思つて頂きたい。と云ふうちに、お讀みの方は、此の婦人の脊丈が分りますか、分りますまい。……分らぬ譯で、御覽に成つたのではないから——不思議な事には、私は其の姿を一目で、おそろしく

黒 髪

脊の高い婦だと思つた。いや、思つたでは済まぬ、實際見たのであるが。

「おや〜……」と思はず獨言を云つた——凡そ何のくらゐの脊丈であつたらう、と其處等の兩側の屋根と、二階家と、軒の看板と、電信柱を、肩と思ひ、胸と思つて、茫然として見上げ見下ろしたのは、蓋し、擦違つて、通過ぎて、蹴躓づくまで、はツと思つて、ぐるりと振返つてあとを視た時で。私は大木戸の方へ七八歩……唯、最う、三又の其の何處へ行つたか其の婦は影もなかつた。

駈戻つて覗いたら、どの横町へか曲つて——ふら〜と行くのが見えたかも知れぬが、人の魅せられた時は希有のもので、然うする心も出なかつた。

髪の黒さよ、輝く艶、肩へ颯と……頸を細りと髻結つて捌髪にしたのが、さながら蓑を被いだかと房りして、眞日南に向ひながら玉なす縹緞の美さ。抜けるほど色の白い、遠山の眉と云ふのが、霞に浮いて、ぼつと濃く、や、俯向き加減の、鼻筋が通つて、心持、片頬へ歪めた朱の唇の口許に微笑を含んで、半ば伏目の、あゝ、睫毛を睨いたら、海も山もたゞ芥子粒に成つて入りさうな黒い瞳と視た……顔は大きかつた。——

「一寸お尋ね申したいのですが、彼の坂は何と云ふんでせう。」

「へい、何です。」

聞かれた男は、私の問を解き兼ねたのであつた。烏打帽を横ちよに被つた、それは炭屋の若い衆で。

「彼處に、坂がありません。あの坂には、何坂とか云ふ名がないでせうか、御存じではありませんか。」

「解りませんな——ちえツ。」と言つた。

私は突落されたやうにハツと思つた。そして極りが悪かつた。大方、其處等を、うろ〜して、狐憑とでも見えたであらう。

片側町は、早や陰つて、横倒しに映る家々の屋根の影に、陽の色が赤くなつて浸んだ。あれ〜！火の見る階子を下から手繰るやうに、する〜と人が昇る、と見ると、角の日溜りに智慧の輪を賣る露店があつて、取巻いた人數が、地ぐるみ投出された形で、みな階子の下へ飛んだ。

火は早稻田であつた。

其の翌年二月半ばの事である。

黒  
白晝、矢張り同じほどの時間に、芝の伊皿子に用があつて、歸途に札の辻から乗つた上野行の電車の中に、其の……と云ふのも、不思議な氣がする。其の坂の三又で視たと同じ婦人、と云ふ



まで、前の時の顔容に、判然とした見覚えはなかつたが、何故か自分では然うに違ひないと思はれる……色の抜けるほど白い目鼻立ちのきつぱりした、まつとうに眞向きで、蓑の如く黒髪を捌いたのが、芥子よりは微細な塵埃の一つ一つ舞ふのが金色に光つて見える、明い窓に、左右に幅廣と云ふより前後に分厚な姿で、向つて左側の丁ど眞中あたりに懐手して腰を掛けて居た。唯見た處が、普通の女、寧ろ男の、脊丈にも幅にも二層倍は確にある、大きな白い幽霊である。黒緇子かと思ふ丸帯をしめた……

其の妙なのは、然うして、確に男の二人ぶりは有ると思ふ身幅にも係はらず、一々人数を讀んで見たわけではないが、心づもりに、細りと座を取つて、左右へ少しも障らず、前後に聊も幅つたかない。——露月町で下りた。下りる時見ると、髪の毛が恰も天井に届いて一杯に成つて、身幅も、通る處左右へ一杯に成つた。あつと思ふと、可加減に扉だけの丈にかはつて、づつと車掌臺へ出て、それ立つた。とたんに一大事が起つたのであるが——

殆ど奇蹟だつたのは、大宇宙は循環し、もの事は繰返すと聞けば、電車に何年目に一度づつ、こんな事があるか、尋ねて見たい。釣革に立つもの一人もなく、然ればとて左右に空席は一ヶ所もなく、處々で客の上下するたびに、水を量るばかり、整然として一並びに成つた。で、下りた時も、其の婦唯一人で、路は坦々として大道の如しであつた。

私は宙へ釣られるやうな心地がしつゝ、右側の端から、幾度も伺つたが、慙う、何う身體を扱つて、人を垣に遣直しても、透かす毎に、何の方へも、婦人はきちんと私の目に眞正面に、ひたりと向ふので、面影ばかり、しげしげと、睫毛までは、まぶしくつて視つめられなかつたのである。……

車掌臺へ出た——立つて下りかけたと思ふと、其の勢だから脊丈が空を貫く電信柱の尖までは届いたらう。が、ドンと留つて、車はじりじりに二三間逆に戻つた。救助網を下からなぐりつけて、唯何の事はない、大煙突を横に打倒したやうな黒煙が地面へ渦を巻いて吹掛ける、と箕で煽る如き炎が、めりくゝと其處の家の軒を嘗めた。

把手を握つた其の時の車掌の形は、暴風雨の船から、遠く幽に、屹立した燈明臺を望むが如きものであつた。

四

私に、慙う云ふことを話した人がある。

其の人は、例の吉原の大焼の時、公園から廓内を見つゝ立つた。……最う其時は、水道尻から大門——門は既に煙の裡に大蛇の蟠る如く崩れて居た——まで仲の町は、唯これ白晝の火と風で

あつた。火の響、風の音ばかりで、寂然として一人の影もない。障子、襖が其の空を、焼けつ  
つ、木の葉の如く飛び、飛びつゝ、打撞つて、ばらばらと炎を散らす。……突然熊蜂が吹飛ばさ  
れたやうに、あれ／＼と云ふ角町邊の曲角から吐出されたが、半纏腹掛の若いもので、磨硝子を  
嵌めた雨戸を一枚擔いで居る、慌てたらしい、公園を目的に飛んで来たが、丁ど、屋根へドツと  
燃抜ける、もとの兵庫屋の前で、蒲團のかゝつたまゝ、投出されてあつた炬燵檜に蹴躓くと、もん  
どりを打つて、板戸ぐるみ引くりかへると、手足も顔も血だらけに成つた、硝子が毀れた怪我で  
ある。それなのに、四這ひに這ひながら、丹念に一箇づゝ、其の磨硝子の缺片を拾ひはじめた。  
危い、止せ、危い、と公園で人の喚くのも耳に入らずに、――

いま、其の若いものが駈出した、矢張り角町の角から出たと思ふ……仲の町の真中を、水色の  
部屋衣で、下髪で、色の雪のやうに白い、脊の高い遊女が一人、澄まして袂を取つて、左右が炎  
の仲の町を、繪のやうに通つて来る。遁迷つた最後の一人であらう、と見たが、悠々としたもの  
で、夜中に肅然として長廊下を渡る態度があつて、火ぐるみ煙が其の姿を包んでも、ひとへに炎  
の龍のそれが、襜に見えよう。……風采と氣位が今時の妓でない。吉原の地主神として何百年か  
地の底に眠つたのが、此の大火に、目を醒まして、と小さな欠伸で、  
「おゝ、明るい。」か何かで、すら／＼と仲の町へ出掛けたらしい。淀みもせず、急ぎもせず、す

つと来て、件の這ひ身に硝子を拾ふ若いものの傍を通つた時は、裳が、颯と瀧のやうに落かゝつ  
た水の影に、半纏着は、山椒魚が泳ぐやうに見えた――と言ふのであつた。  
公園の人ごみへ入つた、と思ふと、もう何處を探しても、それらしい姿はなかつた。

五

大正六年九月三十日、満月の夜より、翌朔日の未明を襲つた眞夜中頃の東京の颯風は、……大  
江戸にも嘗てなかつた、或は有史以來と稱ふる未曾有の天變であつた。

全都到る處、就中、深川一帯、月島砂村の海嘯の大慘事は、尙ほ人の耳、われらの記憶に新な  
る處である。

山の手に、怪訝な事があつた。――  
麴町九丁目の通りの、或米屋の主人が葺戸の透間から覗いたのであるが、あれまでの風雨の中  
でも戸外は朧に明かつた。明い、と云つても、何か、冥途の明さのやうで、たよらない、もの凄  
い寂い、可恐い、覺束ない明ではあつたが、ものの黑白は、よく辨ずる、魔界の光ともたとへら  
れようか、毒龍の鱗の炎、惡鬼の眼の輝に映し出されたとも思はれる。  
主人は此を話す時、申戯らしいが、大蛇に吞まれて、其の腹の中に居ながら、奴が、谷と言は

黒 髪

ず、峰と言はず、のたくり歩行くまゝに、輶けつ轉びつしながら蛇肉を通す、娑婆の明で見たやうなものだと言ふのである、——實際蒸暑かつた。——

一間、八尺の屋根看板は、鬼が弘目屋をするやうに、すたくくと空を駈け、軒燈は幾つとなく、翹翹に、素首を刎ねられた如く、血の青い尾を曳いて宙を飛ぶ。

唯、此の米屋の軒下から、大八車が一臺、がたくと丑満頃に目を覺まして、がたんと大欠伸をした形で、一つ上下に桿を振ると、溝板を眞直に大通りの眞中さして、のツこんくと出て行く。

向うに横町がある——其の角で、頭突きに、トンと一つ桿を突いて、上へ、がつくと上つて、ドンと云つて、同じ荷車が、同じ大通の眞中に向つて、腹を擦つて煽つて出て来る。

誘はれたらしい形で、其の角の菓子屋の軒下から、箱車が、ひよこんと飛んで、不狀に、兩輪を盃斯の如くに突張つて、またヒヨイと飛出す。

出る、一軒隣の洗濯屋から出る、斜向うの麵麩屋から出る。……来た！来た！半藏門の方から、ハツ／＼ハツ／＼桿で呼吸をして喘いで来た。溝の上で、空廻りをして、とんぼを切つて、チヤリンと舞つて、キリ／＼吹寄せられたのは、戸惑をした自轉車である。或は遠く、がら／＼がら／＼と、紀尾井町の坂あたりを、駈上るかと思ふ響きがある。

をかしたものは、破車で、街樹をたよりに、ひよつぐらと横あるき。

で、仇白い、雨水の小波を立てる大通へ、あとから／＼、湧いて出て、二十七まで數へたが、

やがて五十臺の上はあつたらう……

「や、何うだ。」

「此の體は。」

「何うにも、恚うにも。」

「話のやうだ。」

巫山戯た奴等が、唯先づ行儀よく桿をついて、各々挨拶でもするやうだつけ——むく／＼むくむくと煽りを切つて輪を立てる、と一所に充ち満ちつ、とち狂ふわ、駈廻るわ、躍上る、のめすり出す。ストーンと仰向けに、ひっくり返つて、ワツはツ／＼と笑ふのがあると、逆筋斗を打つてキヤツ／＼と燥ぐ。畝る、波打つ、迂る、廻る。

あらく／＼到頭、あんな事をはじめた。荷車の中でも間のびのしたのが、二臺、兩方からドンと當ると、ぐらく／＼と體に鱗立たせて、引組んで、嚙合つて、ずんと天上に突立上る、と自轉車めが、から／＼と一臺の其の脊筋の所へ舞ひ上つた。かと思つて、颯と、木の葉で、ものの一町ばかり退くかと思へば、もの凄じい地響き打つて、兩箇の荷車は兩方へ、躍つて仰向けに、打覆つ

髮 黒

た。

燭を喰つて、哄と退く。其處に寄集つた夥多の車が、礫のやうに、ぐわつと散る時、樹は倒れる、屋根は崩る、看板は走る、瓦斯燈は飛ぶ、瓦は數を知らず。椋鳥は大群をなして風に散つた。

唯一呼吸つくと、悪寂しく、けつたるさうに、荷車がなま欠伸を大きくして、たゞきつけられた所から、ゴツとんと發足する。と、向うでドンと楯を突いて、更めて……いや、今度は早い、見る／＼うちに三十四五臺。

六

此處へ、新宿邊から出たのであらう。轡頭を確乎と取つて、馬方が一人、大八車を曳いて來掛つた。

積んだのは、石炭だつたとも、炭だつたとも言つて、定かでない。如法の暴風雨の中を乗切つて來た勇氣は、敗軍のあとを、唯一騎、砲車を曳いて殿するにも劣るまい。

「どう、どう、どう！」

其の聲は一步づ、しかし、土を踏んで、柱で洞突きをするやうである。

と思ひながら、吹なぐる風に馬も、馬方も、たゞ宙に釣られて、打揚火花から出たやうに、ふらふらとして通るぞ、と其の米屋の目に見えた。

矢よりも疾く、空を飛ぶ雲の色は眞白である。黒雲も、灰汁の雨も、餘りの風の激しさに、磨研かれたに相違ない、處々、輝く白銀の光が交つた、其の上を颯と渦を捲いて、薄紅い桃色の雲が走ると、此に萌黄の電光が、キリ／＼と擲んで燦々と燃えるのが、瞬く間に消え、且つ輝いて、天地は燦爛たる、其の大踏鞴を踏む。

凄しい影は、横狀に逆る熱い雨を切つて、波打つ地に倒に映つては、粉に成つて繁吹に飛ぶ時、鬼の車の其の演戲は、今日の悲劇を大棧敷で御見物の魔王の手から、衝と花束を投げられたのであつた。

雲と、其の電光と凝つて紫に彩られて、車が三臺——今度は數を増した——ぐわら／＼と鳴つて六ツの輪を、中空で高く躍上つた時である。

油のやうな光る馬が、じり／＼と退る、と馬方が蹴鞠のやうに成つて米屋の軒下に飛込む、とたんに、ドン、と二三間、向つて、半藏門の方へ、前脚を衝々と出たと見ると、雲の白泡嚙むばかり馬の首が空を切つて棹立ちに成つた。が、車をブンと宙に振つた——可恐き風の力である——振つたか否や、逆返しに、舊來た四谷見附の方へ疾風の如く駈出した。

黒 髮

驚破と、恰も此の合圖を待つてた體に、二臺、四臺、六臺ならびに、數十臺の車ども、あの其の大八車ともに、長い橋が馳る、と見えて見附(四谷)の方へカラ／＼と飛ぶ、と、いま打撞つて仰向けに倒れた三臺が、後れて成らじ、と叱られた體に居直つて、輪などはまだるい、楫を摺らせて、雨の早瀬に泳いで續く。

唯、寂然とした。

「海嘯だよう。」

うら少い婦の聲で、麴町の其處から聞いて、兩國——永代、大川沿と思ふあたりで、もう一度、

「海嘯だよう——」

と幽に聞えた……と同時に、……

窓の前の櫻街樹の梢よ、と思ふ所で、

「ほ、ほ、ほ。」

と、女が笑つた。

飛ぶ雲の桃色も、散る電光の紫も、惟ふに、其の笑聲の色なのであらう。

私も聞いた——

家内中、一つ所で畏つて、屋の棟に、瀧の落つるが如き、瓦の崩る、音を聞きながら、電燈も

瓦斯も何もない。直ぐにも消えさうな蠟燭の灯一つをたよりに、唯時過ぎよ、夜が明けよ、と、

枕時計を隣きもせず瞻つて居た、正に二時半であつたと思ふ。

戸外で、例の笑聲。

「ほ、ほ、ほ。」

唯、顔を見合せた。

「恚うして居ませうか。」

顔は眞蒼であつた、家内は、腰紐を堅く、何か覺悟をして居た。

例聞く話聲は、其の夜の風であつたらう。それは聞えず、トあつて四角の聲音は、さて聞く間がなかつた。

「二階が危い、……遁げよう、裏の平屋を頼まう。」

二人は袖で、蠟燭の灯を庇つた——

幸に無事だつたのである。

大通りでは、其笑聲がしたと同時に、きやつと云つて馬方が氣絶した。

米屋が介抱をして夜が明けてから聞くと、屋根より、背の高い、色の白い婦が、街樹の空で莞

爾するのを見たのだ、と言ふ。

忘れもしない、——あの晩は、……然うだ夜の十二時過ぎ、太く酔つて芝の青葉館から歸つて来た。いやはや、面目次第もないが、途中で其の……

「一寸、若い衆。」

「……………」

「若い衆。」

館に出入りする帳場の車夫が、ぴたりと車を留めて、振返つて、

「不可ません、旦那、……手前は、館のお咲さんから堅く頼まれて参りました、確にお宅まで御届け申すやうに……御覽なさいまし、町所番地まで書いた、旦那の所がきまで握つて居ります。」

此の前の時は俥の上で寐て了つて、いくら聲を掛けても起きなかつたさうで、車夫は言附かつた私の町内へ來ながら何處へ着けて可いか見當が知れない。一町内は寢鎮まつて居るし、持て餘して居ると、一軒、密と格子戸を開けて戸外を覗いた婦があつた。覗いたのは家内で、餘り同じ所を俥が行つたり來たりするので、もしや、と思つて開けたのだつたが。

「……ぞ、とずつと俥をつけて、

「御新姐さん、御届けものを持つて参つたのでございますが、御宅様のぢやございませうまいか。」

「どんなもの。」

「へい、え、旦那ですがね。」

「まあ、とばかりで、

「何處から。」

「芝でございませうよ。」

「あ、」と言つたが、うっかり受取れない、と言ふものは、内のだか、餘所のだか、母衣に包まつて居て、まるで見えない。

「まあ、一寸御覗きなすつておくんさいまし。」

前母衣を擧げると、馬鹿野郎。

もつと手酷いがある。それと同じ晩に歸つた神田の友だちが一人、此れも拙者大酩酊と言ふ代もので、同じく、ぐつすりだつた處が、同じく心當の町内が皆寐込んで居て、此は又生憎と何處でも戸を開けたものがない。車夫は、撲られる覺悟で、やけに何處かの、戸を敲いて、漸く起きて顔を出した男に、

「濟みませんが、此の旦那は、御町内何家の方だか、一寸、御覽なすつて下さい、遣切れません

や。

と云ふもので、其のお咲さんと云ふ美人が、此男と懇意なため、友達効に……然うやつて、私は所かきまで御厚意に預かつたものの……

「しかし若い衆。」

「否、しかしぢやありません。斷つてと仰有るなら、此處でお下りなすつて、旦那が一人で勝手な所へおいでなさいまし。」

「面白い。」

「私は、しつかり言ひつかつて來たんです。うけ合つて參つたんですから、然うすりや空俵を曳いて、御宅まで行つて所かきだけお届け申して歸ります覺悟ですから。」

「面白い、下してくれ。」

と降り掛けたが、ふと見ると、柳が枯れた、お濠端で、お濠の水が大浪を打つ。一方は野原の吹曝して、何町歩行いたつて辻俵など見つかりさうな景色ではない。然も凄まじい風である、それにも母衣を掛けないほどの酔方でも、此の景色にはぎよつとして、

「此は和睦しよう、相濟まない。」

「眞個ですぜ。紙入なども、しつかり結へて、帯に結へつけてあるつて言つてでしたが、可うござ

ざいますか。間違ひがあると、頼まれた私が申譯かねえんですから。」

「大恐縮。」

で、曳出した。が、此の寒風に面を向けて、自若として、母衣を刎ねて居ようと言ふ加減に成ると、私は其の頃、滑稽なやうな、馬鹿々々しいやうな、とぼけたやうな、其癖、凄いやうな、可恐いやうな、薄氣味の悪いやうな、一層のくされ、然うした方が始末の可いやうな氣がして成らなかつた。俵の上に限つた時で、然も、此の邊を通る時が最も多かつた——（一つはそれがために、濠端を傍路へ外れようとしたのであつた。）——すいと駈けて行く俵の上から、案内なしにストンと飛ぶ、否、飛んで見たい、飛んで見たくてむすくするのであつたから。……

分けて、此の邊は、はずみを附けると、柳の梢に輪を描いて、お濠へ、どぶん！堪らない。が、待つてくれ、さうすりや誰方もおさらば、は知れてゐる。

實は御勝手なだけども、……實は未練があつて、熟と堪へて居いゝした。

其が、其夜などは、背中へ羽衣の袖を掛けて、端麗な天女が、三人ぐらゐるで、すつと浮かし上げてくれさうな氣がして、我慢が仕切れぬ。それ、あれ、それ、あれ。

黒

あゝ危い。

と、腕を伸ばして、路の眞中を馳つて行く俵の上から、屈きさうな譯はないが——心持、怒う

柳の枝に掴まつて、飛出す、身體を、支へよう、とすると、あ、手が届く！……届く、と思ふと、枝に届くと思ふと、其の、手が、梢に、觸る、梢に、觸る、と思ふと、其の手が、水の、上を、越して、向うの、石垣の、松に届く。

左の手が然うだから、右の手は、と思ふと、もう、何處かの煉瓦造の建ものの二階の窓に届いて居た。お、電信柱を越すぞ、胸は道幅一杯に成つて、顔が、今見た原中へ堆く成つたと思ふと、足が牛ヶ淵邊にづいと伸びる。

九段坂に掛つた時は、スツ／＼スツと其の巨大なる身體が宙に上つて、上つて、風を切つて、星が晃々と大きく見える……其の、星が、颯と、袖を鏤めて、私は、鎧を着た、……は可いが、一番高い電信柱に氷柱の如き穂の尖つた、其の自身の槍を小脇に抱へた。神佛の助けだと思ふ。

此の扮装でなかつたら、私は少くとも發狂したらう。

坂を上つて、顔つき合せて、ハツと、目を見合つたは何等のものぞ。

廣場を蔽うて、眞白に立つた、偉大なる、否、偉大はそぐはぬ。夜目にも著き黒髪に對しても、寧ろ莊嚴なる婦である。其の黒髪は、あの大村氏の銅像よりも、星を胸にして高かつた。

電信柱の槍取直して、薙と鎧の袖をしめると、

「ほ、ほ、ほ。」

と花が咲いたやうに笑つて、すらりと立直つたと思ふと、坂の上の石の常燈明が裾模様に見えて、懐手のうしろ姿で、九段坂に掛つたらしく、少し、低く成つて、すつと下りて、組橋の郵便局の大屋根の時計の盤面を、婦が近視眼でもありさうに、濃い眉を、トさし寄せて覗いた時、下ぶくれの横顔が、霜よりも白かつた。海に暗礁の黒い其の大きな瞳に、針が、其の夜は零時三十分を、まぎ／＼とさして居る。

ふつと消えた。

すつくりと、猿樂町あたり中空の棟の瓦を十五六軒、一齊に高く踏んで、霜の波に、又其の姿が立つた、と思ふと、殘月を黒髪に懸けて、一ツ橋の方へ、一面に颯と影が射した。

もの凄いな女の聲で、

「火事だよ……」

私は坂の上の辻車の帳場の所に蹲つて居た。

館の車夫は、何にも見なかつた。が、坂を上ると、悚然して、何故か手足が窘んで、一步も歩行かれない。同じなかまを力に、車を留めて居たのであつた。

誰れも知つた、神田區の約全部を焦土に化した、大正二年二月二十日の大火の、火を發したのが、



其時である。

明方新聞の號外を視ると、私は眞蒼に成つた。焼跡を黒く塗つたのが、火元を捌髪の頭にして、細腰の長い裳が、一ツ橋の堀で留まつて、黒髪の靡いた端か、其れとも帯の結目かと思ふのが、裏神保町あたり、片袖を胸に袖口の見える所が、神保町の電車の停留場に成つて、視るも艶な、婦の黒い影が、紫の蜘蛛の血を絞つたやうなインキで、ベタリと塗られて、迸つて、濃く濡々として居た。

私は普門品を稱へた。

因に申します、當日其の號外の焼跡の圖は府下の大小新聞どの姿も殆ど同一で、中には火元と白く抜いた形が髻結つた黒髪の頂に宛然一枚の櫛の形に成つて居るのさへございます。姿は少し俯向き加減の、髻でしめた、すんなりとした所が、猿樂町の女學校の所に當つて、横顔のふつくりした割に、頸の細りとして、そしてしなやかな撫肩が——こゝに無限の慈悲が見えます——東明館のあたりに成つて居ります。で、もの凄いまで紅の笑聲は然ることながら、優しく悄れた風采が、つゝましかかな袖口が、くりかへして申しますが、神保町の四辻に當ります、袖口が一寸斜に出て居ます。お濠端で、くつきり裾の見えるのと、水に消えたのと、其を印した黒い姿に二種ございます。それから、町所番地などを明細に書込んだ繪姿は、夜があけてか

ら印刷されたのでせう、活字の濃さとともに、白んだやうに白まされて、それは霞か霧か、障子紙一重隔てた幻のやうに見えるのもあるのです。實際一目見ると悚然としますが、云ふに云はれない、威嚴と、したしみと、もののあはれを知つた情と、可憐と、然も凄さと神々しさとが備はつて居ます。——お心がけて御所持の方は、みそなはせ給へかして。……

友染火鉢

私たち作者なかまの草紙樓が、前年の秋の洪水に、其の知合を、水見舞に行つて、上野の大師寄、櫻木町の片蔭を、強い西日を除けて通りかゝると、

旦那々々。

「おや、變つた所で。」

と言つたも道理。比羅も、暖簾も新店の、蕎麥屋の格子先に立つて居て、いきなり聲を掛けた天窓の禿げた年倍の親仁の、中形浴衣に三尺で茶漉の面は薄汚れたが、何處かに底磨きが掛つて、あかの抜けたのは、上野の此の邊とはづつと見當違ひの、或其の劇場で顔馴染。三河の九七か、三谷の九助か、三九で通つた留場の若衆であつた。

「親類廻りかね、彼岸の參詣には飛んだ早過ぎる。」

と云ふ……風采ではなかつたが。

「旦那。」

へ、へ、と三九は額で笑つて、下目を斜達に暖簾を覗いて、

「今度其の、へ、へ、こんな事をはじめましたんで、料理屋、待合とでもありますかい、町が、此の櫻木町で、藪、更科と來ちやあ、何方もね、お寺も同然でございますよ。お宗旨違ひかも知れませんが、些と何うぞ、お通掛りに御參詣下さいまし。」

「正に通掛つて居る、參詣しようか。」

と帽子を取つて、

「御免よ。」

「入らつしやい。」

と、帳場から、一寸昔の忍ばれる黄楊の櫛の女房と、赤い襷の小婢が諸聲なり。

「大層な景氣だね。」

「此の通り、満員でございましてね。へ、へ、其の癖、お涼い事は承合なんで。二階はございませんが、づつと奥へお上んなすつて召上つて下さいまし。」と、三九は土間をあと退りに框に添つてあひしらふ。

鉢火染友  
「難有う、が却つて、此處が可い。よく風が通すから。」と客は、さら／＼と暖簾の揺れる、入口の端近へ。

「彼方も涼うございしますが、思召次第、お心安い方が可うございます。」

と言ふ、向うが生垣の田舎めいた小庭を前に、縁に腰を掛けて、後向で、涼しさうな冷麥で、銚子を二本ばかり並べて手酌で飲んで居る、半纏着の、色の白い、肩つきの、すらりと意氣な、年若な男が一人、折から他に客はなかつた。

「早速、お齋にありつきませうか。」

「齋は酷いや、旦那、精進ものでも割はうんと利かしてあります。否、手前ものを、恠う言つちやあ旦那の前でございませうがね、根が、」

と屈腰で、框の縁に握拳で、

「好きから思ひついてははじめました家業なんで、亭主八杯でございますから、釜前も随分氣を入れて居りますんで、へい。粉も本場の絹ぶるひつて所を一つ、めし上つて下さいやし、え、お誂は？」

と意氣込まれると、胡坐には些と早し、整然と坐るも變なりで、小さな麻蒲團の上へ立膝して、草紙樓は細の羽織の紐を解くやうな手つきをして、紛らかしに俯向いて、

「然う言はれると、面目ないがね、此の残暑だし、陽氣が悪い。……江戸兒の蕎麥屋さんにや、別して申兼ねましたが、私の所は饅餡をね。」

「え、く結構、饅餡はまた格別手打でございます。冷したのを召食るんで、」

「何ういたしましたして——玉子とぢ。」

三九は腰を切つて、づいと立つて、

「とぢ——饅餡臺。」

と意氣込んで、顔を赤くした、些と頓興。

「酒は飲むよ、……私も男だ。」と笑ひながら、客は、何故か、羽織を脱いで氣勢つて言つた。

二

「何うも、御丁寧で恐入る。」

お燗は私がお加減を、で、三九が自分で釜前へ立つて、やがて銚子を運んで来て、旦那故ツとお酌を、と割膝の桃尻で畏つた時、客は、猪口を仰向けて恠う言つた。が、單に亭主のお酌ばかりに就いてではなかつた。……然うして燗の出来までに件の帳場の黄楊の櫛が、小婢も待たず自分で團扇を持つて出て来て、そよくと煽いでから、お使ひなさいまし、と會釋つた上、羽織を、すツと言はせて、トンと疊んで引退つた、それをも籠めた慇懃である。

「いや、何うも、」

三九は一太刀浴びたやうに、仰山に額を壓へて、

「却つて御迷惑でございませうが、お馴染効でございまして、難有い事で、へい。……つい、まだ、つづの新店だものでございませうから、御覽の如く、伽藍の如しで、否、駄洒落どころぢやございませぬ。……それでも出前の方は、お蔭様で、此で可なりでございませぬ、と言ふのは、旦那も、水見舞に、慫うやつてお出掛けなさいました……」

はてな、何うしてか知つて居る。

「右の洪水で、根岸邊から、近廻と言ふので、此の新開の新築ならびへ大分お立退きで、昨日、今日、御混雑の最中、盆も暮も一齊で、蕎麥、素麵をお支度がはりになさいませぬ、人様の御難儀を、旦那の前でございませぬが、出前持は、奴を振つて歩きます。が、悲い事には、店がと申すと、此の吹抜けぢや……」

樹立を通す青い風が、紺の暖簾を颯と吹く、櫻木町は森の影。

「晝寝の他はございませぬ。全くな、奥店かけて、お二人、御一所のお客様は、今日がはじめてでございませぬ、三九庵大入の氣がいたしますよ、へい。……え、然やうで、では、故ツと頂戴、これは飛んでもないこと、恐入ります。」

と一杯うけて、

「奥に在らつしやいます、若旦那、」

若旦那と言ふか、……あの印半纏を。……見た處は職人であらう、兄哥らしい。

「……矢張其の。」

と杯をうけて居る拳を、唇に當てて、ちゆうと吸つて、疊の縁へ一寸置いて、

「芝居で、お馴染様をな、旦那、私、木戸口でお見掛申しまして、平にお附合を願ひましたやうな次第で、へい、へ、へ。飛んだ宿場の、ツン／＼テンの幕開でございませぬよ。」

「追つては御本陣承合ひ、とお祝ひ申すがね、御主人みづから宿引は、樂でないね。」

「まさか、旦那、晝旅籠から立話ぢやございませぬよ。……と申して、下心は矢張り馬方の影でも覗きに出たのでございませうが、先刻な、ふと、此の門口へ立ちますと、それ、向うの、」

と禿頭を、下に沈めて、上目で戸外へ見當を附ける奴。……

「……あの樹林の間を、飛々に三軒目の、眞新しい二階建の、あの、お邸。……唯今、旦那がお立寄りでございませぬ。」

道理こそ知つて居た……根岸なる御行の松のあたりから、水難を、こゝに避けた、件の家を見舞つての歸途なのである。

「御覽じまし。」

と三九は、客が差置いた團扇を逆に取りつて、柄でさして、ト及腰で搔分けるやうにすると、ひらめく暖簾に、木の葉も揺れつゝ、二階が見える縁の中。

「表の縁に、……あれ、水々とした青簾が、まだ捲いたまゝ立掛けてございませう。それ、簾にちら／＼と挾つたやうに、楓の葉が、恠う、冴えた朱だの、艶々しい群青、萌黄、磨いた漆が光るばかりに交りました薄もみぢと云ふので、おのづから此の西日を避けて、月が射すほど綺麗に涼しく見えませう。光琳模様の、繪漆の、大きな桐火桶なんでもございませうがね。

客は三九に指さされて、縁の風にちら／＼と動かした雙の瞳を、屹と据ゑると、居直つて、黙つて、そして、ゾツとしたやうに單衣の襟を引合はせた。

三

洵や、繪の具に水の滴るばかり、簾ながら影の映す、其の空ばかりは雲澄んで、藍の深い淵の如く映る目に、――遮つて搔る、暖簾に染めた三九の二文字も、……裏を翻して草書の龍に見えるのであつた。

亭主は膝の上に腕組して、差覗き状の顔を寄せつゝ、  
「……先刻な、唯今も申通り、ふと何心なく戶外に立つて、あの火鉢が目につきますと、はツと

目が覺めましたやうな、然うかと思ひますと、急に夢を見たやうな、恠う、ぽツとして、何の事はない。私、魂が五つぐらゐに分れて、紅、萌黄、黒い漆と、一枚一枚、色が染まつて、ばらばらと散るかと思や、重り合つて、ちら／＼して、氣が恍惚と成りました……で、ございしますので、あの……

團扇とともに、首を掉つて、

「……奥の、若旦那が、其處へ、お通りがかりを、お附合を願つてからまた出直して見ましても、未だ何うも、夢のやうな氣がしてなりません。でございませうからな、思掛けなく、旦那が彼方様から出て來らつたので、吃驚して、……又夢ぢやあ果しがあせん、今度は、漸と目が覺めました。が、矢張り夢のやうでございませうよ。」

「眞個だね」と、深く思入つたやうに客も言つた。

「へい、直き其處に見えますのが、何故か、薄り、霧か、霞で、幻のやうに見えます。――旦那、些と大袈裟のやうぢやございませうがね、何も、枝ぶりの佳い松を見たからつて、いきなり三寶、羽衣かと思ふ狼狽ものはございません、錦葉を描いた火鉢だつて、天女の住居と極つちや居ませんが、一目で、魂のふら／＼と成る仔細、と言ふのがございませうよ。

昨日の晝過ぎでございませう。……根岸の奥に、聊か縁類がございませうので、此の出水でござい

ますから、私、其の一寸見舞に出掛けました。お定りの、右の青竹の杖でがして、案山子が接骨  
醫に通ふと言ふ、氣の利かない形で、じゃばく、どぶく、と探りながら、金杉のあの通りを、  
据眼に成つて、とぼつて行くんでございますが、雲は掛つても炎天で、氣の早いのは、着物  
を脱いで、頭へのせて、其の上へ麥藁帽子、引くるめの頬被りで、素裸。などと言ふ、異形なの  
が交りましてな。深うごわすな、流れるく。激流なるかな、生命の瀬戸だ。静にく、なんて、  
往來で聲を掛合つた處は、泣くより笑で、頓と晝狐に魅まれたと言ふ體裁でございますわさ。  
笹の雪横町を左に見て、平家方怨靈の露拂が、弓杖支いたり、と云ふ見得で、右の竹の杖で伸  
上つて、前途は何うでがせう。……されば、御行の松は、づつぷりと沈みました。梢の處が、龜  
の甲ぐらる辛うじて浮いて居ます、と嘘ばつかり。……所から茶人が居ります、古い年をした隠  
居が、自棄に、そんな事を言ひながら擦違ひますね。

唯目の前へ、俗に、おまじな横町と言ひます、あの曲角から、すつと泥水を切つて、船首を、  
通道へ、漕いで出た小船があります。と思ふと流が一條、浪を敷いた花道に成りましてな、濁つ  
た中へ、蓮の花は佛染みまます、はつきり杜若が咲いたやうに、藤紫の結綿の、娘と申すと世話過  
ぎませう。媚かしい、が品の可い、それはく、水際立つた、お美しい嬢さんが、お一方。日當り  
ぢやあ萎れさうな華奢なのが、立退きの躰。端正としたお姿で、唯たお一人。……門番の爺やか、

出入りの植木屋か、と思ふ、白い眉毛の房りとした、半纏着の親仁が、眞新しい手拭を引扱んだ  
腰を極めて漕いでるんでございますが、私、此の年配でも正のものは存じません。

大名の奥方、姫君の火事の立退、馬で、それ、雑方で、あの、きり、とした綺麗な處を、錦繪  
で見居りますが、そんなものではございませぬ、美人の姿は洪水を船で遁げる時に限ります。が、  
先方様は御迷惑。あ、雲が切れた、赫と日が當る、消えやしないか、とハツと思ふと、扇子を  
な、颯と開いて、露の垂れさうな前髪へ當てなすつた、撫子のみだれ咲。其の片袖を弱々と凭懸  
つて居なすつたのが、あれ、お調度の、あの錦葉の火鉢。青貝入りの棚が一箇……」

四

「巻物だの、御本がね、旦那。」

と三九は手を重ねて仕方をして、

「其の書棚に並びましてな、火鉢との間に、扇子の陰の島田でさ。褥も脇息も、そりや見えやし  
ませんや。けれども、書院から疊なりに、すつと水の上を浮出して、お出なすつたに宛然、と申  
しや、其の貴方な、お座敷の前後を、此方人等地下の者が土足で踏歩行くと同一で、お船の周圍  
へ眞晝間、異類異形な人通り、濁水をざぶく遣る。……極りが悪いや旦那、お娘御にや、露骨

でございますから、日除と一所に、ト其扇子で、御容子ッたらなかつたね。尤も、船は舷を向け、通りを横に漕いで、扱て、あの流れに掛りました、が、可恐いもので、川幅だけ瀬を造つて、渦を巻いて流れて居ます、と思ふと船首が、ぐるりと向をかへて、ぐいと紫川を下りました。處へ青々とした柳の枝の引断れたのが、上方から、ざつと葉を巻いて流れて来て、船底を潜りさうに成つて、一靡きして舷に掛つた、すぶ濡の枝の中へ、細り白魚の指が掛る……や！揺れるぞ、落ちる身を、柳に縋んなさるんだ、とヒヤリとしますと……」

一膝出て、

「旦那、お優しいねえ、柳を掬上げてお遣なすつた。

扇が眉をはづれますと、其の撫子は袖に啖いて、恠う日に驟して御覽なさる。……白い手の、柳の枝から、緑の雫が、すら〜と落ちて、流の水も青く澄む……あれ、あの簾の中に居なさるやうな影になる時、親仁が一棹、ぐいと張ると船首が廻つて、向う横町へ、すつと船が入りました。が、其處ばかり、ものが涼しさうに見えたんてございましてね。

え、かう、芥々した、だらしのない親類の家へ行つて、それから、私手傳ひましたが、何だか、いまの船を見た目ぢや、不思議に、龍宮の裏長屋で働いて居るやうな氣がしますんでね、ばちやく〜疊の上を泳いでる金魚だの、ぴよん〜鴨居を飛びやがる蛙なんか、何うだい、三九、

なぞとね、旦那、口を利きさうで成らなかつたんでございます——昨日の事で。——

へい、……其の唯今が、お二階の同じ時繪のお火鉢でございませう。……御覽なさいまし、何うやら、それ、火鉢の際に撫子の扇子さへ、半開きで、そつと置いてあるやうぢやございませぬか。驚いた！これは何うも。」

と目を摺つて、又暖簾を覗いて、

「ね、旦那、お姿は横町の水へ消えても、私の目によあ、昨夜から、まだ無く成らねえんで……一體、何うかして居りますかな。」と茫と言ふ。……扇子ぢやない、が、撫子の花とおなじ薄い朱鷺色の、深草形なる團扇が、袖から這つたやうに、其の火鉢の横に落ちて居た。

其處に面影さへ立つのである。

「旦那々々。」

草紙樓は、二度呼ばれて、ハツとするまで、恍惚と其を視めて居た。

「全體、まあ、何ういふ方で在らつしやいますんで、……失禮ながら、へい。……あれでございませぬから、」

と何故か、聲さへ潛めながら、

「私なんぞ、何うも、昨日、根岸の横町から、あの船のまんま、森の上を船で漕いで、二階へま



で、宙をおいでなすつたやうな、妙な氣がして成りません。」

「申戯ぢやない、仙人や、魔法つかひぢやあるまいし。」

「否、其の天女。」と、手庇する。

「美しいがね、矢張り、たゞの、人間のお嬢さんだよ。……おまじなひ横町を、お前さんが見たと言ふ、其の船で、一度、上根岸の親類へ立退いて、今朝、朝顔の露の中を、早く彼處へ引越して來なすつたツて事だつた。」

「船で……それとも御歩行で？」

「何。」

と聞返して、客の草紙樓は堪へず笑つた。

「翼が生えて堪るものかね。」

五

「で、旦那、え、焦つてえ、何う言ふお方でございますんで？」

「繪の先生だよ。」

「……繪の先生、と御親父様が。」

「否、船に乗つた、其のお嬢さんさ。」

「はてね。」

「知つてるだらうがな、御近所に、毎年……やがて始まる展覧會で、人氣第一と言ふ立女形だよ。梨の眞白な影が、水に映ると言ふ心の梨映と書いて……女史と稱ふる處だけれど——お前さんは、羽衣だ、翼だと言ふがね——雲の中、山の手どころか、中仕切の暖簾からちらく、緋鹿子が見えようと言ふ、町風生粹の娘さんだから、其處で、お梨映さんくと皆が言ふのさ。」

「……あの方が。」

と三九が、片膝を躍らすばかり、發機に掛つて、ポンと敲くと、——帳場格子を乗出して、諸手へ、ばたりと團扇をば提げた上へ、顔を据ゑた黄楊の櫛が、吃驚したやうに胸を引く時、奥の縁の半纏着は、銚子を肱へ取つて傾けた。——垣に夕顔は見えないけれども、釜前の湯の薄煙が、土間を抜けて、ふわ／＼と其の半纏の襟に掛る……

「が、旦那、餘りお若い、御名譽の方にしちやあ……尤も、田之助なんざ、十六で江戸一番の立女形でございましたがね。」

「二十三四かな。」

「へい……」

「何處に、」  
「それ、其處に——猪口を持つて……」

「な、それ。」

「え？」

「へい、影に……へ、影にしちや、餘り判然とお在でなさいませ。」

「御内陣を伺つちや、何とも恐多い事でございますが、女體だけにな、氏子は一層、心得て置きたいもので、御本尊様は御一體でございませうか、乃至……」

「む、そりやね、今はお一人だがね、何だ……そりや、蔭にはちゃんとお在だよ。」

「御神酒のつもりで。……おと、へい、ございやす——櫻木町の氏神様でさ、ねえ、旦那。……當年は、錦葉と一所に此處等花が咲きませう。森の下へ、づらりツと、飴屋、酸漿賣が並ばうも知れません。御祭禮でございませう。」

と又受けて、

「何しろ、何うも、大したもんでございませなあ。」と、何を恐入つたやら、三九は肩を揺つて、首をぐつたりと腕を組んだ。

「一杯あげよう。」

「御神酒のつもりで。……おと、へい、ございやす——櫻木町の氏神様でさ、ねえ、旦那。……當年は、錦葉と一所に此處等花が咲きませう。森の下へ、づらりツと、飴屋、酸漿賣が並ばうも知れません。御祭禮でございませう。」

「馬鹿を言へ！御壽命は千年だ。……が、待てよ、まあ、しかし、まあ、其のま、と言つてもいなあ。」と杯の雫を切つた。

「駒込の吉祥寺へ、火で焼出されたと言ふ處を、洪水で遁げた、お七と言ふのでございませよなえ。」と、眉毛をもじやくと顔を上げる。

草紙樓は、ト息を吐いて、

「馬鹿を言へ！御壽命は千年だ。……が、待てよ、まあ、しかし、まあ、其のま、と言つてもいなあ。」と杯の雫を切つた。

「とんと早や、」  
「今なんざ、夕顔の浴衣だつけ、勿論肌衣なし、素足だらう、一寸紅の入つた友染と、色縺子腹合せの帯か何かで、結綿が少々、がツくりと成つて、引越たての紛糾の間を、人を除けたり、荷を潜つたり、親御、妹弟たち、手傳の人数の中を、彼方此方して居なすつた。……生地な所は尙ほ少い。立働きに上氣して、ほんのりとした顔で——いきなり格子を開けた私を見て、——框へ膝をトンと支いて、

（まあ）  
思懸けない、とばかり、うつかり見なすつた、濃い睫毛が、鬢のおくれ毛かと思はれる……内氣さ、優しさ、幽婉さ、そして可愛らしさ、と言ふものは、九とも言ふまい、美しい十七八……」

「とんと早や、」  
「今なんざ、夕顔の浴衣だつけ、勿論肌衣なし、素足だらう、一寸紅の入つた友染と、色縺子腹合せの帯か何かで、結綿が少々、がツくりと成つて、引越たての紛糾の間を、人を除けたり、荷を潜つたり、親御、妹弟たち、手傳の人数の中を、彼方此方して居なすつた。……生地な所は尙ほ少い。立働きに上氣して、ほんのりとした顔で——いきなり格子を開けた私を見て、——框へ膝をトンと支いて、

「とんと早や、」  
「今なんざ、夕顔の浴衣だつけ、勿論肌衣なし、素足だらう、一寸紅の入つた友染と、色縺子腹合せの帯か何かで、結綿が少々、がツくりと成つて、引越たての紛糾の間を、人を除けたり、荷を潜つたり、親御、妹弟たち、手傳の人数の中を、彼方此方して居なすつた。……生地な所は尙ほ少い。立働きに上氣して、ほんのりとした顔で——いきなり格子を開けた私を見て、——框へ膝をトンと支いて、

「馬、馬鹿な、罰が當る。」と、慌しく團扇を拾つて、二階の火鉢の見え隠れ、煽つ暖簾を、ぴたりと伏せた。

六

時に、何家かの女中が来て、蕎麥の出前を誂へた。

「蒸籠七つ……ヘツえい。」

と素頓興な聲で請けて、筒抜けに聞えるものを、三九故々立つて釜前へ通すが早い、やがて忙しさうに元の座へ……

「で、旦那、何う云ふ事に成りました。」

「何う云ふ事とは？」

「呆氣ないや、お前はんが、」

と微酔の乗りが来ると、旦那則ち、お前はんで、

「格子戸の土間に立つて、お娘御が上框へ支膝でトン……と其だけぢやあねえ……」

「何うにも、斯うにも、他に仕方がないぢやあないか。——長持の上で帯をしめて、衣服を着換へて、座敷へ船をつけさして、玄關を漕出したと云ふ、……其を聞いて、お見舞を言つて、残暑

の砌、此上とも、偏に御身御厭ひ。……失禮、然やうなら、他に仕方があるものかね。」

「理窟をおつしやりや其まででございますがね、何だか何うも、もの足りませんぜ。」

「實はね、三的。」

胡坐で、客も三的に成る。

「然う言ふが實を言へば、私だつてももの足りないんだ。」

「御覽じやしな。」

「待ちなツたら、日は長い。」

と、西日は射さぬに、いゝ色で、

「もの足りないのは、あの、火鉢だ。思ひも寄らず此家へ入つて、お庇で恚うして見られるんだ。が、實は今日は、火鉢を見ないで歸るのか、と打明けて言へば、殘惜くて、胸へポカンと穴があいて、空洞で居たんだ。」

何年越、寐た間も忘れず、目に染まる錦葉の蒔繪。

先刻、お前さんは、うまい事を言つたね。魂が幾つかに分れて、紅と、萌黄に染まるやうだと  
言つた。……火鉢を見ると、私は百にも千にも碎けて、一枚々々、ちら／＼と錦葉に成る。……

一體、島田鬚と友染で、あの前へ、すぐに姿に成らうと言ふ御本人のお梨映さんより、火鉢の

方には、前にお目に掛つたくらる、浅からぬ因縁なんだよ。」

「それは又……へい、成程……」

「御免下さいまし——誰方様、と三指で、内弟子か、お小間使か、存ぜず、容柄のいゝのが、可しかね。……何某と申すものでございます、お嬢さんはお宅にお在でございますか——此だがね、……御存じの容子だから、先生は堅苦しい、然うかつて、お師匠さんも相肖ひません、處で……お嬢さんに一寸お目に懸りたく存じますさ。」

何かの會で、一二度逢つた。見知越だつたから、やがて、取次いで、何うぞ、此方へ。……お取次の案内で、通されたのが、座敷なり、晝室なり、お梨映さんのお部屋です。

すぐに庭の、日南の縁に障子が閉つて、二三輪咲いた、と思ふ、梅の枝の影法師。最う、ほんのりと奥床しい薫がする。

ト其の櫺子窓に黒檀の机が据つて、天鷲絨で額を取つた紫地縮緬の座蒲團が媚めかしい。が、其處に姿は見えないで、褥の前に据ゑてあるのが火鉢なんだ。蒔繪も火桶も、お屋敷過ぎる。繪を描いた火鉢ぢや分らず、桐の刳抜だと隠居様が撫でさうだし、弱つた。漸と考へて、お梨映さんに相應しい、此なら何うかと思ふのがある、友染火鉢。

周圍に、繪の具皿が五六枚、紅を溶きかけたのが一枚、灰に乗つて、眞紅な木の葉が、重つて

散りかゝつたやうな櫻炭から、ちら／＼陽炎が遊ぶ景色に、薄紫の火氣が立つ。

日當り一杯の明さに、ほろ／＼尉の白いのも、胡粉に見えて美しい。

遠音に鶯の聲がして、しと／＼しと／＼と、八疊のまた片隅の、裏庭に向いた、明取りの腰窓の障子の外へ、大屋根から廂を傳つて流れるのは、雪解の雨垂なんだが、蒼空に遙な富士から引いて来た化粧の水の氣勢がある。……

色の白さも思はれよう、藤紫の結締、半襟も紫の一粒鹿子。黒出の縞八丈に、友染の下襲をして、茶と萌黄翁格子の帯、核なしの薄いお太鼓。緋と浅葱を段染の麻の葉の長襦袢で、曳手をフツと抜けたやうに、——一寸小刻の棲音が三つ四つ、密と留まると思ふ時——襖から出なすつたのが、お梨映さん。

——忘れもしない、一昨々年の二月の上旬。前の晩に、大雪の降つた翌日だつた……」

七

「當日は障りなく、然うした美しいお梨映さんに逢へる瑞相と言つても可い。行く途中の、横町、露地、何處にも、上野の山がほんのり紫の霞を映して、垣根つゞきの庭、背戸の、常磐樹には青い空、葉のない枝には日が薄紅く色を染めて、木戸、廂、生垣に消残つた雪も暖い。溶ける雫も

春の水で、肩と擦々と思ふ低い所を、彼方、此方で、鶯の聲がする、と、桃の枝、櫻の枝、柳の  
 糸と、其の聲を聞いた時に、目に見えないでも夢のやうに花の姿を視めながら歩いたつけ。  
 お行の松に翼を休めて、白鷺が一羽。

それさへ、恍惚と幻のやうに思つた矢先、火鉢の錦葉は、現より、尙ほ濃かつた!

繪具皿の繪具より、ちらく色に立つ裾捌きで、其の座蒲團を、疊に敷いた袂の端より後へ摺  
 すと、莞爾する口許へ袖を當てて、優しい聲で、

(まあ。)と云つて、片手を下へ、一輪櫻の平打が重さうに、房り掛つた濃い藤色の結綿が、襟脚  
 に揺れて俯向く。

御挨拶をしなすつたんだ。」

と草紙樓が杯を拾ふと、

「成程。」と云つて、蕎麥九は一つ叩頭をする。

「私はね、何も負惜みを云ふんぢやないが、繪の先生の處へ狼と變じて入込んだにしちや、其日  
 の用と言ふのが餘りに巧計が無さ過ぎる、……何、或雑誌社から頼まれて、口繪一枚、此が絹本  
 でない、版下と言ふんだから、展覽會の立女形ともあらうお嬢さん、引受けてくれるか何うかね、  
 且は急ぎなんだから、其上にも無理を肯かせようと言ふ段取なんだ。」

「無理をお肯かせなさらうと言ふ、成程。」とじろりと額を突出す。

「馬鹿にするなよ。」

「おつと頂戴。……罰杯々々。」と又すぐに其の額を敲く。

「すると何うだ、返事をお聞きよ。」

(まあ、私に。)と恥かしさうに、すんなりとした膝の上へ袂を取つて、

(出来ますか知ら、私に……どんなお手習でございませう。)

餘りしをらしさに、私は思はず顔を見た。藤たけたものだつた。鶯が又啼いてね、梅の薫が、  
 ぼつと来る。

(嬰兒を一人。)と實際を喋舌つた、がこれとは思つた。——動悸がしたよ。あの雪解の水の音。

何處かに刻む時計の針が雀のやうに轉る。……半間な事は、慌てた媒妁人が口を利くやうだ。

(まあ。)

(嬰兒なんか仔細なしでせう。——いや、これも悪いかね。)

と、草紙樓が今度は巻蓆を吸さして、

「お嬢さん、また莞爾して、

(でも——私には……でも嬰兒ちゃんでしたら。)

とふつくりした鹿の子の襟を、悄らしく兩袖で抱込みながら、

(何んな嬰兒ちやんでございますの? ……お幾つぐらゐるな、そして、お頭は?)

私が此の位、と兎ほどな大きさを手で仕方して、註文を話すかね、

(おかつばさん……まあお可愛いんでございますわねえ。……お氣に入りますか如何ですか、一生懸命にお清書をいたして見ます、そしてお目に懸けますわ。)

蜜の如き言葉です、これぢや雪の溶けた雫が、花の露に成りさうだね。

お小間使が名物の笹巻鮎を、一人分づゝ取分けて、盆に乗せて持つて来た。——三的、……と  
呼ぶ。とろりとして聞いて居た三九は急に呼ばれたので、例の興がった返事なり。

「へいッ」

「いや、お前さんの前だがね、饅頭の玉子綴を箸でちぎる野郎にや、小鮪の鮎は覺束ない。せつかくの思召し、頂戴は勿論、嫌ではないのだが、顔を見るやうに、見ないやうに、退いて、そして横から恠う透すと、青笹の中は、鮎に、穴子、赤貝の紐、一騎當千の伏勢ばかり、味方と思ふ海苔巻は一つもない。

内端に、優婉に勧められるのに、お茶ばかりも飲んで居られず、私は弱つたよ。打露呈けた。……貴女のお手皿に、密とお見掛け申しますが、實は其つ海苔のを頂きたい。

(あら何うしませう。……)

まあ、私は、もう赤いのを箸をつけて了ひました。

(結構です。)

(でも……)

(否、是非。)

(では、先生、其のお箸で。)

(何う仕つて、貴女のお箸で……)

(でも、私のは、何うぞ貴郎の。)

困つた私は、遣切れないから、手でしよ引いた。

(失禮。)

(あら。)

(御免下さい。)

(まあ、嬉しうございますわ。と所帯崩して笑ひながら、袖を口許へ當てなすつた、前髪の媚かしさ、一輪櫻の品の佳。)

と、煙草を持つ手を組んだり、解いたり、兩方の箸と一所に話が千鳥がけに、こんがらかる、

と面中が擦つたさうに、三九は掌でべろ／＼と撫廻した。——時に、ふと、煽切りに咽せたらしく、奥の縁なる半纏着の兄哥が、續けざまに咳をしたので、ト此方は齊しく彼方を見た。帳場格子の女房は、途端に、はた／＼と胸を煽ぐ。半纏着は一息吐いたらしく、廂はづれに空を仰いだ……源氏車の裾に並んで、銚子の數は七本に殖えて居る。

「……黒地に、白と浅葱櫻の花片ばかりを、ちら／＼と、處々へ、細い紅で香の圖をあしらつた友染の羽織を疊んだなり、先刻の小間使が持つて来て……」

（お嬢様、お寒くは、在らつしやいませんか、お風邪をめすと不可ません、お召しなさいまし。）……で、いきなりすらりと袂を解いて、左右もあらせず、背後から矢庭に着せる、片袖通りかけたのを猶豫つて、

（まあ、お客様の前で失禮な。）と恚う、撫肩を一寸曲つて、身を揉むやうにした時に、私は、此の仇氣ない嬢さんの、さすがに仕事の苦勞を祝た、肩の凝を思つた、かよわさを思つたが——小間使が、顔を根らめて手を離さうとすると、

（でも、折角だから——御免なさいまし。）と、苧環の模様で紅白を巻きながらすら／＼と、千々に纏れた絲の亂れ、藤色の地の羽織の裏が、綺麗に、細りと成つて、縋るやうに恚う絡はる……」

「大和屋……」

「む、繪で見た俳優だ、同感だ。寒く成るほど又美しいと思つた。……三的……お梨映さんが、其の羽織を着たなりで、其の華奢さで、氷りついた根岸の道、消残つた雪の蒼いほど冷い宵闇に、私を送つて出なすつたんだぜ。……ぬく／＼此方が、外套を被て居られるか、獣臭い、毛織もの襟巻なんぞ。——」

いや、話も、氷に打つた、が、最うね、小間使が、羽織をと云つた時は、障子の日當が一枚ずれて、床柱が薄すりと暗く成つた。床には籠に投入れの白玉椿。何とかの色紙と言ひさうな歌の軸が掛つて居たがね……急に寒さが身に沁みた。」

「いよ／＼此處も些と、涼し過ぎるほどでございます。」

と、見返る柱に花は見えぬ、張廻した比羅も墨繪。其の下に、黄楊の櫛、お梨映さんの容子の佳いの引つけられるものであらう、襟を搔合せて坐つて居た。——其時、小婢が又縁側へ、一銚子運んだのである。

「春は如何に浅くつたつて、二月と云ふのに、そんなに早く日の暮れよう次第はない。が、……扱て、やがて、暇申して、橋がかりへ退散をしようとする、折から茶を入れかへて来た小間使に、ね、と二つばかり囁いて、又……」

(ね)とお梨映さんが莞爾する。

三九唐突に掌をハタと敲いて、

「さあ、事だ。」

「何。」

「旦那、黙つちや居られませんや。處は根岸で、寮住居のお嬢さん、三もので御酒でがせう。」

「慌てなさんな。」と、吃驚する。

女房は團扇を顔へ、「ほ、ほ、ほ。」

八

「黙つてお聞き。——

(あの、両親が、今日は親類へ参りまして、妹と二人で、留守事に、お汁粉を拵へて居たんでございませぬ。あの、不可せんか知ら、差上げましては。)

否も應もあるもんですか。お白酒ぢやないけれど、私は雛の客に招かれた光榮を有してね、謹んで二碗頂戴した。もう、其の時分に、椿が光る電燈が點いて、紫蘇の實でお茶と成ると、既にして日が暮れたものなんです。——

(でも、横町が暗いんですもの、……それに、足許が悪くつてお危うございませぬ、凍てて迂りますから。)

でね、ちゃんと言ひつけてあつたらしい。玄關へ、送られながら、一所に廊下を出た時は、抱柏の紋のついた、あの馬乗提灯を點けた、小間使が立つて居たつけ。

(恐入ります、いや、もう何うぞ。)

背から、着せ掛けられる、安直な外套を、恐縮に及んで、摺抜けるやうに、ぐいと合はせて急いで出ると、藍端緒に爪皮の、お嬢さんのと丁ど並んで居ます。承塵の壁に、もう一つ、白い顔の見たのは妹の方らしかった。

(では、きいちゃん頼みましたよ。)

手を支かれたので、も一つ叩頭をすると、お梨映さんは提灯を取つて格子戸に、ぱつと咲いた明い花が、トンと肩で出ると、早や枝折戸の梅の枝に臍に成る。門まで行く路、敷石も長かつた。おまじなひ横町では、まだ二つ三つ店障子にうつる燈に、ちら／＼提灯が紛れたつけが、金杉の通を横に切つて、近路らしい、音無川を向うへ渡ると、もう塀ばかり、垣根ばかりね、そして雪が蒼い。針を並べたやうに見えて、目に、すく／＼と痛い／＼……成程なる。

(お危うございませぬ。)



(貴女こそ。)

(私は馴切つて居りますもの。)

が、墓だの、塔婆だのが、凄い星の影に、ばら／＼とあるあたりで、私はふと立停まつた。

(しかし、お歸りが案じられます。)

(否、唯今通りました、直てまへの、あの石段を上ります家は親類でございませう。それに歩行きつけて居りますから。)

あ、此の前途に地藏尊があるんぢやあないか。

三九が思はず乗つて出て、

「え、ございませうよ。」

「來教寺の。」と女房が言つた。

草紙樓は居直つて、

「……豫て聞いた、其の地藏へ、願掛けをして居なさるんだ。……義理で添はれない、——世間は暗夜だが、月の潮と書く、月潮さんと言つてね、おなじ畫師で、師匠が一所の、兄妹弟子の兄さんで、戀人があんなさる。——入組んでるから、事情はこゝぢや言はないが——玉章の音信さへ、勿論逢ふことが出来ないでつた、苦しい、果敢いかなので、何と、寒の中、水垢離を取る

んだつて言ふぢやないか。」

二人は呼吸を呑んで目を睜つた。

「あ、此の、美しい、清い、優しいのが、と其の時熟と然う思つて、思はず顔を視ると、何となく恥かしい氣が通ふか、片袖を胸へ深く、ト其の袖が、風もなしに向うの袖へ靡くのと袖口を組違へて、たよ／＼とした白い手首を、慙う、忘れたやうに、提灯を柄長に取つて、私の方へ差寄せ、細りした肩へ鬢が着きさうに横を向く。……反らした頸が水のやうに白澄んで、片頬の見える耳のあたりへ、灯の其の影がほんのり映した。

晝間の梅の暖かさを、鐵のやうな星が吸つて、劍とも、氷とも、其の夜の寒さと言つたら——私は、我知らず外套を脱いで、手に丸げた。

其なり氣を籠め、心を詰めて、口も利けないで、一町足らず寂い處を並んで歩いたが、凍てた路に、お梨映さんの、足駄の音が、カラともコロとも響かない。此に、願掛の往通ひに世を忍ぶ心の中が惟はれる、と一所に、身に重いものは、平打の簷ばかり。で、何うやら、座敷の、あの火鉢の、雪に誘はれて徜徉ひ出た、あこがれの魂の形とも見え、切なる戀の生靈のやうにも見えて、凄いが、しかし、其の思が、尊かつた、氣高かつた。

寺の門に片廂の、地藏尊が、星を額に、灯を裾に雪を踏んでをがまれた。

私は、うつかり、

(御参詣をなさいませんか。)

(は、……)

思掛けないやうに、振向きなすつた。そして、ちつと見た涼い瞳に、思ひなしか、睫を閉す涙がある。

(では、一寸御挨拶を申します。)

(其のお提灯を。)

つツと片側へ遠慮した、が、傍に見ては居られない。手向けるやうに其の白蓮の苔かと思ふ掌が揃ふと、あゝ、色々の棲が石に氷る。……冷さ、寒さは、細い頸を切るやうな、あゝ、せめてもと、此の時思つた、火鉢の繪が颯と幻のみみぢして、其の結綿の上を庇ふと見れば、忽ち其葉も雪に伏つて、背へ散りかゝる、袖へ、しまく。羽織の花が、心念の搖きに響きつゝ震へるのが、亂るゝ雪に宛然で、積る、積る、衣も消える、袖もなく成る、たゞ、一束の雪に成る。其の膚へ、黒髪ながら寒の水、三十日の水垢離の、やつと果てた、いまと思ふと、私は目が暈んで前後を忘れた。時に後毛がはらくくと、簪がカチリと落ちる。

提灯の柄をキシツと、震へる齒に啣へると、両手で外套を其の肩に掛けた。

(憚りながら、月潮さんの事は存じて居ります。お氣味の悪いことはない、破蓑同然のものですが、——)

お梨映さん。)

少時してお梨映さんが、外套越に、下から密と手を取つて、

(お貸し下さいまし、先生。とよろゝと立ちながら、其の外套を地藏尊に被せて、犇と縫つて……肩を抱いて頬摺して、はつと泣いて……)

「失禮をします。」

「や、若旦那。」

「お世話でした。」

と、半纏着の兄哥は——これも水見舞であつた——何處で怪我をしたか、小指を紙で結へたのが、青竹を引挟んで衝と出た。

——歸つたあとで、此を貴方に、と言置いた、と小婢が私に持つて來た。半紙を卷いた一筆がある。

先生は貴女に惚れて居ます。が、不可ません。(こゝに、あの二階のと同じ形の火鉢を描いて、墨にませた、もみぢの葉の紅は、まぎゝと滴る血汐で)これをお上げなさいまし。

梨映様

月潮生

660

土間に足を踏んで暖簾を覗くと、淵かと思ふ縁の中に、月が欄干の立姿。面も浴衣も夕顔の花である。火鉢の錦葉の散るか、と見えたは、袂をそれた團扇の色の薄紅、地に落ちぬまに、白鷺が森を飛んだ。

向のかはつた、屏風坂の方に、影を曳いて、時に、悄然として竹をかついだ月潮の後姿は、名ある俳優の扮したる、少き浦島に肖たのである。

茸の舞姫

「奎さん、これ、何？……」

と小兒が訊くと、眞赤な鼻の頭を撫でて、

「綺麗な衣服だよ。」

此は又餘りに情ない。町内の奎若どのは、古筵の兩端へ、笹の葉ぐるみ青竹を立てて、繩を渡したのに、幾つも蜘蛛の巢を引搦ませて、商賣をはじめた。まじく控へた、が、然うした鼻の頭の赤いだからこそ可けれ、嘴の黒い鳥だと、其まゝの流灌頂。で、お宗旨違の神社の境内、額の古びた木の鳥居の傍に、裕福な仕舞家の土藏の羽目板を背後にして、秋の祭禮に、日南に店を出して居る。

賣るのであらう、商人と一所に、のほんと構へて、晴れた空の、薄い雲を見て居るのだから。

館は、今でも埋火に鍋を掛けて暖めながら、飴ん棒と云ふ麻穀の軸に巻いて賣る、賑かな祭禮でも、寂びたもので、お市、豆捻、薄荷糖などは、お婆さんが白髪に手拭を巻いて商ふ。何でも

買ひなの小父さんは、紺の筒袖を突張らかして懐手の默然たるのみ。景氣の好いのは、蜜垂ぢや蜜垂ぢやと、菖蒲團子の附焼を、はたくと煽いで呼ばる。……毎年顔も店も馴染の連中、場末から出る際商人。丹波鬼灯、海酸漿は手鉢の傍、大きな百日紅の樹の下に風船屋などと、よき所に陣を敷いたが、鳥居外のは、氣まぐれに山から出て来た、もの賣で。――

賣るのは果物の類。桃は遅い。小さな梨、粒林檎、栗は生のまゝ……うでたのは、甘藷とも店が違ふ。……奥州邊とは事ははつて、加越のあの邊に朱實は殆どない。こゝに林の如く賣るものは、黒く紫な山葡萄、黄と青の山茶莢を、蔓のまゝ、枝のまゝ、其の甘澁くて、且つ酸き事、狸が咽せて、兎が酔ひさうな珍味である。

此のおなじ店が、筵三枚、三軒ぶり。笠被た女が二人並んで、片端に頼被りした馬士のやうな親仁が一人。で、一方の端の所に、件の奎若が、繩に蜘蛛の巢を懸けて罷出た。

「これ、何さあ。」

「美しい衣服ぢやが買はんかね。」と鼻をひこつかす。

幾歳に成る……奎の年紀が分らない。小兒の時から大人のやうで、大人になつても小兒に齊しい。彼は、元來、此の町に、立派な玄關を磨いた醫師のうちの、書生兼小使、と云ふが、それほどの用には立つまい、たゞ大食ひの食客。

世間體にも、容體にも、瘦せても袴とある處を、毎々薄汚れた縞の前垂をめて居たのは食溢しが激しいからで——此の頃は人も死に、邸も他のものに成つた。其の醫師と云ふのは、町内の小兒の記憶に、もう可なりの年輩だつたが、色の白い、指の細く美しい人で、ひどく權高な、其の癖癖のやうに、口を利くのが優しかつた。……細君は、赭ら顔、横ぶとりの肩の廣い大圓鬚。眦が下つて、脂ぎつた頬へ、恚う……何時でもばらばらとおくれ毛を下げて居た。下婢から成上つたとも言ふし、妾を直したのだとも云ふ。實の御新造は、人づきあひは固よりの事、門、背戸へ姿を見せず、座敷牢とまでもないが、奥まつた處に籠切りの、長年の狂女であつた。——で、赤鼻は、章魚とも河童ともつかぬ御難なのだから、待遇も態度も、河原の砂から拾つて來たやうな體であつたが、實は前妻の其の狂女がまうけた、實子で、然も長男で、此の生れたて變なのが、や、育つてからも變なため、其を氣にして氣が狂つた、御新造は、以前、國家老の娘とか、それは美しい人であつたと言ふ……

或秋の半ば、夕より、大雷雨のあとが暴風雨に成つた、夜の四つ時十時過ぎと思ふ頃、凄しい電光の中を、蜩が鳴くやうな、うらさみしい、冴えた、透る、女の聲で、キイ／＼と笑ふのが、恰も樹の上、雲の中を傳ふやうに大空に高く響いて、此の町を二三度、四五度、風に吹廻されて往來した事がある……通魔がすると恐れて、老若、呼吸をひそめたが、あとで聞くと、其の晩、

齋木(醫師の姓)の御新造が家を拔出し、町内を彷徨つて、疲れ果てた身體を、社の鳥居の柱に、黒髪を颯と亂した衣は鱗の、膚の雪の、電光に眞蒼なのが、瀧をなす雨に打たれつゝ、怪しき魚のやうに身震して跳ねたのを、追手が見つけて、醫師の其の家へかつぎ込んだ。間もなく柩と云ふ四方張の俎に載せて焼かれて了つた。齋木の御新造は、人魚に成つた、あの暴風雨は、北海の濱から、潮が迎ひに來たのだと言つた——

其の翌月、急病で齋木國手が亡く成つた。あとは散々である。代診を養子に取立ててあつたのが、成上りの其の肥満女と、家藏を賣つて行方知れず、……下男下女、薬局の輩まで。勝手に掴み取りの、梟に枯葉で散り／＼ばら／＼。……藥臭い寂しい邸は、冬の日賣家の札が貼られた。寂とした暮方、……空地の水溜を町の用心水にしてある掃溜の芥葉場に、枯れた柳の夕霜に、赤い鼻を、薄ぼんやりと、提灯の如くぶら下げて立つて居たのは、屋根から落ちたか、杓若どの。……親は子に、杓若とも杓藏とも名づけはしない。待て、御典醫であつた、彼のお祖父さんが選んだので、本名は杓之丞ださうである。

——時に、木の鳥居へ引返さう。

こゝに、李若が其の怪しげなる蜘蛛の巣を擴げて居る、此の鳥居の向うの隅、以前醫師の邸の裏門のあつた處に、むかし番太郎と言つて、町内の走り使人、齋、非時の振廻り、香篋がへしの配歩行き、秋の夜番、冬は雪掻の手傳ひなどした親仁が住んだ……半ば立寄り、長屋建て、掘立小屋と云ふ體なのが棟ある。

町中が、李若を其處へ入れて、役に立つたないは話の外で、寄合持で、雑と扶持をして置くのであつた。

「李さん、何處から仕入れて来たよ。」

「縁の下か、廂合かな。」

其の蜘蛛の巣を見て、通掛りのものが、苦笑ひしながら、聲を懸けると、……

「違ひます。」

と鼻ぐるみ頭を掉つて、

「さとからぢや、は、ん。」と、ぼんと鼻を鳴らすやうな咳拂をする。此奴が取澄まして如何にも高慢で、且つ翁寂びる。争はれぬのは、お祖父さんの御典醫から、父典養に相傳して、脈を取つて、ト小指を刎ねた時の容體と少しも變らぬ。

李若が、さとと云ふのは、山、村里の其の里の意味でない。註をすれば里よりは山の義で、字

に顯せば故郷に成る……實家に成る。

八九年前晩春の頃、同じ此の境内で、小兒が集つて風を揚げて遊んで居た——李若は顛の大きい坊主頭で、誰よりも群を抜いて、のほんと脊が高いのに、その揚げる風は絲を惜んで、一番低く、山の上、松の空、桐の梢とある中に、僅に百日紅の枝とすれ／＼な所を舞つた。

大風來い、大風來い。

小風は、可厭、可厭……

幼い同士が威勢よく唄ふ中に、李若は唯一人、寒さうな懷手、絲卷を懷中に差込んだまゝ、此の唄にはむす／＼と襟を摺つて、頭を掉つて、そして面打つて舞ふ己が風、合點々々をして見せて居た。

……にも係らず、烏が騒ぐ逢魔が時、颯と下した風も無いのに、李若の其の低い風が、懷の絲卷をくるりと空に巻くと、キリ／＼と絲を張つて、一ツ星に颯と外れた。

「魔が来たよう。」

「天狗が取つたあ。」

ワツと怯えて、小兒たちの逃散る中を、團栗の轉がるやうに李若は黒くなつて、風の影を何處までも追掛けた、其の時から、行方知れず。

五日目のおなじ晩方に、骨ばかりの凧を提げて、矢張り鳥居際に茫乎と立つて居た。天狗に攫はれたと言ふ事である。

それから時々、三日、五日、多い時は半月ぐらゐる、月に一度、或は三月に二度ほどつゝ、人間界に居なく成るのが例年で、いつか、其のあはれな母の然うした時も、柰若は町には居なかつたのであつた。

「何處へ行つてござつたの。」

町の老人が問ふのに答へて、

「實家へだよ。」

と、それ言ふのである。此の町からは、間に大川を一つ隔てた、山から山へ、峰續きを分入るに相違ない、魔の棲むのは其處だと言ふから。

「お實家は何處ぢや。何う云ふ人が居さつしやる。」

「實家の事かねえ、はゝん。」

スポンと栓を抜く、件の咳を一つすると、これと同時に、鼻が尖り、眉が引釣り、額の皺が縊れるかと凹むや、眼が光る。……齒が鳴り、舌が滑に赤くなつて、滔々として辯舌鋭く、不思議に魔界の消息を洩す——これを聞いたものは、親たちも、祖父祖母も、其の兒、孫などには、

決して話さなかつた。

幼いものが、生意氣に直接に打撞る事がある。

「柰やい、實家は何處だ。」

「實家の事かい、はゝん。」

や、もう其の咳で、小父さんのお醫師さんの、膚觸りの柔かい、冷りとした手で、脈所をぎうと握られたほど、悚然とするのに、忽ち鼻が尖り、眉が逆立ち、額の皺が、ぴりりと蠢いて眼が血走る。……

聞く處か、これに怯えて、ワツと遁げる。

「實家はな。」

と背後から、蔽はれかゝつて、小兒の目には小山の如く追つて来る。

「御免なさい。」

「きやつ！」

其の時に限つては、柰若の耳が且つ動くと言ふ——嘘を吐け。

海、また湖へ、信心の投網を颯と打つて、水に光るもの、輝くものの、佛像、名剣を得たと言つても、賣れない前には、其の日一日の日當が何うなつた、米は兩につき三升、と云ふのだから、此の如き杵若が番太郎小屋に唯ぼうとして生きて居るだけでは、世の中が納まらぬ。

入費は、町中持合ひとした處で、半ば白癡で——たとひ其が、實家と言ふ時、魔の魂が入替るとは言へ——半ば狂人であるものを、肝心火の元の用心は何とする。……炭團、埋火、楢、柴を焚いて煙は揚げずとも、大切な事である。

方便な事には、杵若は切爪の一件で、山に實家を持つて以來、未だ嘗て火食をしない。多くは果物を餌とする。松葉を噛めば、椎なんぞ葉までも頬張る。瓜の皮、西瓜の種も差支へぬ。桃、栗、柿、大得意で、烏や鳶は、むしやくと裂いて鱈だし、蝸牛蟲やなめくぢは刺身に扱ふ。春は若草、薺、茅花、つくつくしのお精進……蕪を噛る。牛蒡、人參は縦に啣へる。

此の、秋は又いつも、食通大得意、と云ふものは、木の實時なり、實り頃、實家の土産の雉、山鳥、小雀、山雀、四十雀、色どりの色羽を、ばらばらと辻に撒き、廂に散らす。但、魚類に至つては、金魚も目高も決して食はぬ。

最も得意なのは、も一つ茸で、名も知らぬ、可恐しい、故郷の峰谷の、蓬々しい名の無い菌も、皮づつみの餡ころ餅ばかりと覆すが如く、袂に襟に溢れさして、山野の珍味に厭かせ給へる殿

様が、此にばかりは、露のやうなだれを垂し、

「牛肉のひれや、人間の娘より、柔々として膏が滴る……甘味そのツ。」  
は凄じい。

が、恠く菌を嗜む所爲だらうと人は言つた、まだ杵若に不思議なのは、日南では、影形が薄ぼやけて、陰では、汚れたどろどろの衣の縞目も判明する。……委しく言へば、晝は影法師に肖て居て、夜は明かなのであつた。

却説、店を並べた、山菜黄、山葡萄の如きは、此の老舗には餘り資本が掛らな過ぎて、恐らくお錢に成るまいと考へたらしい。で、精一杯に賣るものは。

「何だい、こりや！」

「美しい衣服ぢやがい。」

氏は呆れもしない顔して、これは買ひもせず、貰ひもしないで、隣の木の實に小遣を出して、枝を蔓を提げるのを、じろくくと流眇して、世に伯樂なし矣、とソレ青天井を向いて、えへらえへらと嘲笑ふ……

其の笑が、日南に居て、蜘蛛の巢の影になるから、鳥が嘴を開けたか、猫が欠伸をしたやうに、人間離れをして、笑の意味を爲さないで、ぱくりと成る……



と言ふもので、筵を並べて、笠を被つて坐つた、山茶莢、山葡萄の婦どもが、件のぼやけさ加減に何となく誘はれて、此の姿も、又何うやら太陽の色に朧々として見える。

蒼い空、薄雲よ。

人の形が、然うした霧の裡に薄いと、可怪や、掠れて、明さまには見えない筈の、扱いて搦めた連れ糸の、蜘蛛の囿の幻影が、幻影が。

眞綿をスイと繰つたほどに判然と見えるのに、薄紅の蝶、浅葱の蝶、青白い蝶、黄色な蝶、金糸銀糸や消え際の草葉螟蛉、金龜蟲、蠅の、蒼蠅、赤蠅。

羽ばかり秋の蟬、蛹の身の經帷子、いろ／＼の蟲の死骸ながら巢を引揚つて來たらしい。それ等が艶々と色に出る。

あれ見よ、其の蜘蛛の囿に、ちら／＼と水銀の散つた玉のやうな露がきらめく……  
此の空の晴れたのに。――

四

これには仔細がある。

神の氏子の此の數々の町に、やがて、あやかしのあらうとてか――其の年、秋の此の祭禮に限

つて、見馴れない商人が、妙な、異つたものを賣つた。

宮の入口に、新しい石の鳥居の前に立つた、白い幟の下に店を出して、其處に鬻ぐは何等のものぞ。

河豚の皮の水鐵砲。

蘆の軸に、黒斑の皮を小袋に巻いたのを、握つて離すと、スポイト仕掛けで、衝と水が迸る。

鰻は多し、又壯に膳に上す國で、魚市は言ふにも及ばず、市内到る處の魚屋の店に、春と成ると、此の怪い魚を鬻がない處はない。

が、をかきな賣方、一頭々々を、あの鱗の黄ばんだ、黒斑なのを、すぼんと裏返しに、どろりと脂切つて、ぬら／＼と白い腹を仰向けて並べて置く。

もし唯二つ並ばうものなら、切落して生々しい女の乳房だ。……然も眞中に、ツキリと庖丁目を入れた處か、パクリと赤黒い口を開いて、西施の腹の裂目を曝す……

中から、する／＼と引出した、長々とある百腸を、巻かして、束ねて、ぬら／＼と重ねて、白腸、黄腸と稱へて賣る。……剩へ、目の赤い親仁や、襤褸半纏の漢等、俗に――云ふ腸拾ひが、

出刃庖丁を斜に構へて、此の腸を切賣する。

待て、我が食通の如きは、これに較ぶれば處女の膳であらう。

要するに、市、町の人は、擧つて、手足のない、女の白い胴中を筒切にして食ふらしい。  
其の皮の水鉄砲。小兒は争つて買競つて、手の腥いのを厭ひなく、參詣群集の際を見ては、シ  
ユツ。

「打上げ！」

「流星！」

と花火に擬て、縦横や十文字。

いや、隙どころか、件の空若をば侮つて、其の蜘蛛の巢の店を打つた。

白玉の露はこれである。

其の露の鏤むばかり、蜘蛛の園に色籠めて、いで膚寒き夕と成んぬ。山から風す風一陣。

はや篝火の夜にこそ。

五

笛も、太鼓も音を絶えて、唯御手洗の水の音。寂として其の夜更け行く。此の宮の境内に、階  
の方から、カタン／＼、三ツ四ツ七ツ足駄の齒の高響。

脊丈のほども惟はるゝ、あの百日紅の樹の枝に、眞黒な立烏帽子、鈍色に黄を交へた練衣に、

水色のさしぬきした神官の姿一體。社殿の雪洞も早や影の届かぬ、暗夜の中に顯れたのが、や、  
屈みなりに腰を捻つて、其の百日紅の梢を覗いた、霧に朦朧と火が映つて、ほんのりと薄紅の射  
したのは、其處に焚落した篝火の殘餘である。

此の明で、白い襟、烏帽子の紐の縹花なのがほのかに見える。澁紙した顔に黒痘痕、塵を飛ば  
したやうで、尖がつた目の光、髪はげ、眉薄く、頬骨の張つた、其の顔容を見ないでも、夜露ば  
かり雨のないのに、其の高足駄の音で分る、本田攝理と申す、此の宮の社司で……草履か高足駄  
の他は、下駄を穿かないお神官。

小兒が社殿に遊ぶ時、摺違つて通つても、じろりと一睨みをくれるばかり。威あつて容易く口  
を利かぬ。それを可恐くは思はぬが、此の社司の一子に、時丸と云ふのがあつて、おなじ悪戯盛  
であるから、或時、大勢が軍ごつこの、番に當つて、一子時丸が馬に成つた、叱！騎つた奴があ  
る。……で、廻廊を這つた。

大喝一聲、太鼓の皮の裂けた音して、

「無禮もの！」

社務所を虎の如く猛然として顯れたのは攝理の大人で。

「動！」と喚くと、一子時丸の襟首を、長袖のま、引摺み、壇を倒に引落し、する／＼と廣前を、

石の大鉢の許に掴み去つて、いきなり衣帯を剥いで裸になると、天窓から柄杓で浴びせた。

「鹽を持って、鹽を持って。」

鹽どころぢやない、百日紅の樹を前にした、社務所と別な住居から、よちく、臀を横に振つて、肥つた色白な大圓髻が、夢中で駆けて来て、一子の水垢離を留めようとして、身を楯に逸るのを、仰向けに、ドンと蹴倒いて、

「汚れものが、退り居れ。——鹽を持って、鹽を持てい。」

いや、小兒等は一すくみ。

あの顔一目で縮み上げる……

が、大人に道徳と云ふはそぐはぬ。博學深識の從七位、花咲く霧に烏帽子は、大宮人の風情がある。

「火を、ようしめせよ、燠が散るぞよ。」

と烏帽子を下向けに、其の住居へ聲を懸けて、樹の下を出しなの時、

「雨は何うぢや……些と曇つたぞ。」と、密と、袖を捲きながら、紅白の旗のひらくする、小松大松のあたりを見た。

「あの、大旗が濡れては成らぬが、降りもせまいかな。」

と半ば呟きく、颯と巻袖の笏を上げつゝ、唯恠う、石の鳥居の彼方なる、高き帆柱の如き旗棹の空を仰ぎながら、カタリく〜と足駄を踏んで、斜めに木の鳥居に近づくと、呀！鼻の提灯、眞赤な猿の面、館屋一軒、犬も居らぬに、奎若が明かに店を張つて、暗がり、のほんとして居る。

馬鹿が拍手を拍つた。

「御前様。」

「奎か。」

「ひ、ひ、ひ。」

「何をして居る。」

「少しも賣れせんわい。」

「馬鹿が。」

と夜陰に、一つ洞穴を抜けるやうな乾びた聲の大音で、

「何を賣るや。」

「美しい衣服だがなう。」

「何？」

暗を見透かすやうにすると、ものの静かさ、松の香が芬とする。

六

鼠色の石持、黒い袴を穿いた宮奴が、百日紅の下に影の如く踞まつて、びしやツツと、手桶を片手に、箒で水を打つのが見える、と……其處へ——

あれく何ぢや、ばばばば、と赤く、かなで書いた字が宙に出て、白い四角な燈が通る、三箇の人影、六本の草鞋の脚。

燈一つに附着合つて、スツと鳥居を潜つて来たのは、三人齊しく山伏也。白衣に白布の顛巻したが、面こそは異形なれ。丹塗の天狗に、緑青色の般若と、面白く鼻の黄なる狐である。魔とも、妖怪變化とも、もし此が通魔なら、あの火をしめす宮奴が氣絶をしないで堪へるものか。で、般若は一挺の斧を提げ、天狗は注連結ひたる半弓に矢を取添へ、狐は腰に一口の太刀を佩く。

中に荒繩の太いので、笈摺めかいて、灯した角行燈を荷つたのは天狗である。が、これは、勇しき男の獅子舞、媚かき女の祇園囃子などに齊しく、特に夜に入つて練歩行く、祭の催物の一つで、意味は分らぬ、(やしこば)と稱ふる若連中のすさみである。それ、腰にさげ、帯にさした、法螺の貝と横笛に拍子を合せて、

やしこば、うば、うば、

うば、うば、うば、

火を一つ貸せや。

火はまだ打たぬ。

あれ、あの山に、火が一つ見えるぞ。

やしこば、うば、

うば、うば、うば、

……と唄ふ、たゞそれだけを繰返しながら、矢をはぎ、斧を舞はし、太刀をかざして、頭なりに、首を一つぐりと振つて、交るゝに緩く舞ふ。舞果てると鼻の尖に指を立てて、臨兵闘者云々と九字を切る。一體、悪魔を拂ふ趣意だと云ふが、何うやら夜陰の此の業體は、魍魎の類を、呼出し招き寄せるに髣髴として、實は、希有に、怪しく不氣味なものである。

然も些と來やうが遅い。渠等は社の拔裏の、くらがり坂とて、穴のやうな中を抜けて弗と此處へ顯れたが、坂下に大川一つ、橋を向うへ越すと、山を屏風に繞らした、翠帳紅闌の衢がある。おなじ時に祭だから、宵から、其の軒、格子先を練廻つて、こゝに時おくれたのであらう。が、あれ、何處ともなく瀬の音して、雨雲の一際黒く、大なる蜘蛛の浸んだやうな、峰の天狗松の常

燈明の一つ灯が、地獄の一つ星の如く見ゆるにつけても、何うやら三體の通魔めく。

渠等は、すつと来て通り際に、從七位の神官の姿を見て、黙つて、言ひ合せたやうに、音の無い草鞋を留めた。

此の行燈で、巢に搦んだいろくの蟲は、空蟬の其の羅の柳條目も見えた。灯に蛾よりも鮮明である。

但し異形な山伏の、天狗、般若、狐も見えた。が、一際色は、杳若の鼻の頭で、

「えら美しい衣服ぢやろがな。」  
と蠢かいて言つた處は、青竹二本に渡したにつけても、魔道に於ける七夕の貸小袖と云ふ趣である。

從七位の攝理の太夫は、黒痘痕の皺を歪めて、苦笑して、  
「白癩が。今にはじめぬ事ぢやが、先づ此が衣類ともせい……何處の棒杭が此を着るよ。餘りの事ゆゑ尋ねるが、おのれとても、氏子の一人ぢや、恚う訊くのも、氏神様の、  
と嚴に袖に笏を立てて、

「恐多いが、思召ぢやと然う思へ。誰が、着るよ、此の白癩、蜘蛛の巢を。」  
「綺麗な喃、若い婦人ぢやい。」

「何。」

「綺麗な若い婦人は、お姫様ぢやろがい、其のお姫様が着さつしやるよ。」

「天井か、縁の下か、そんなものが何處に居る？」  
と從七位は又苦い顔。

七

杳若は筵の上から、古綿を脚へたやうな唇を仰向けに反らして、

「あんな事を言つて、從七位様、天井や縁の下にお姫様が居るものかよ。」  
馬鹿にしないもんだ、と抵抗面は可かつたが、

「解つた事を、草の中に居るでないかね……」  
果然、言ふ事が此である。

「然うぢやらう、草の中で無うて、そんなものが居るものか。あ、何んと云ふ、どんな蟲ぢやい。」

「あれ、蟲だとよう、從七位様、えらい博識な神主様がよ。お姫様は茸だものをや。……蟲だともよう、あは、あは、あは」と、火食せぬ奴の齒の白さ、べろんと舌の赤い事。

「茸だと……これ、白癩。聞くものはないが、あまり不便ぢや。氏神様のお尋ねだと思へ。茸が婦人か、おのれの目には。」

「紅茸と言ふだあね、薄紅うて、白うて、美しい綺麗な婦人よ。あれ、知らつしやんねえがな、此位な事をや。」

從七位は、白癩の毒氣を避けるが如く、笏を廻して、二つ三つ這奴の鼻の尖を拂ひながら、

「ふん、で、其の、おのれが婦は、蜘蛛の巣を被つて草原に寝て居るぢやな。」

「寝る時は裸體だよ。」

「む、茸はな。」

「起きとつても裸體だになう。——」

粧飾す時に、薄らと裸體に巻く寶ものの美しい衣服だよ。此は……」

「うむ、天の恵は洪大ぢや。茸にもさて、被るものをお授けなさるぢやな。」

「違ふよ。——お姫様の、めしものを持って——侍女が然う言ふだよ。」

「何ぢや、侍女とは。」

「矢張り、はあ、眞白な膚に薄紅のさした紅茸だあね。おなじものでも位が違ふだ。人間に、神主様も館屋もあると同一でな。……從七位様は何も知らつしやらねえ。あは、松茸なんぞは正

七位の御前様だ。錦の褥で、のほんとして、お姫様を視めて居るだ。」

「黙れ！白癩！……と、此様なものぢや。」

と從七位は、山伏どもを、じろくくと横目に掛けつ、過言を叱する威を示して、

「で、で、其の衣服は何うぢやい。」

「は、ん——姫様のおめしもの持て——侍女が然う言ふと、黒い所へ、黄色と紅條の縞を持つた女郎蜘蛛の肥えた奴が、両手で、へい、此の金銀珠玉だや、其を、其の織込んだ、透通る錦を捧げて、赤棟蛇と言ふだね、燃える炎のやうな蛇の鱗へ、馬乗りに乗つて、谷底から駈けて來ると、蜘蛛も光れば蛇も光る。」

と物語る。君が所謂實家の話柄とて、喋舌る奎若の目が光る。と、黒痘痕の眼も輝き、天狗、般若、白狐の、六箇の眼玉も赫と成る。

「まだ足りないで、燈を——燈を、と細い聲して言ふと、土からも湧けば、大木の幹にも傳はる、土蜘蛛だ、朽木だ、山蛭だ、俺が實家は祭禮の蒼い萬燈、紫色の揃ひの提灯、さいかち茨の赤い山車だ。」

と言ふ……葉ながら散つた、山葡萄と山菜萸の夜露が化けた風情にも、深山の狀が思はる。何時でも俺は、氣の向いた時、勝手にふらりと實家へ行くだが、今度は山から迎ひが來たよ。

祭禮に就いてだ。此の間、宵に大雨のどつと降つた夜さり、あの用心池の水溜の所を通ると、掃溜の前に、圓い笠を着た黒いものが躊躇んで居たがね、俺を見ると、ぬうと立つて、すぼんすぼんと歩行き出して、雲の底に月のある、どしや降の中での、時々、のほん、と立停つては俺が方をふり向いて見い見いするだ。頭からすぼりと黒い奴で、顔は分んねえだが、此方を呼びさうにするから、其後へついて行くと、石の鳥居から曲つて入つて、此方へ來ると見えなく成つた——俺あ家へ入らうと思ふと、向うの百日紅の樹の下に立つて居る……」  
指した方を、從七位が見返つた時、もう其處に、宮奴の影はなかつた。  
御手洗の音も途絶えて、時雨のやうな川瀬が響く。……

八

「其のまんま消えたがなう。お社の柵の横手を、坂の方へ行つたらしいで、後へ、すたく。坂の下口で氣が附くと、驚かしやがらい、畜生めが。俺の袖の中から、皺びた、いぼくのある蒼い顔を出して笑つた。——山は御祭禮で、お迎ひだ——とよう。……此奴はよ、大い葦で、釣鐘葦と言つて、叩くとガーンと音のする、劫羅經た親仁よ。……巫山戯た爺が、驚かしやがつて、頭をコンとお見舞申さうと思つたりや、もう、すつこ抜けて、坂の中途の檜の木の下に雨宿りと

澄ましてけつかる。

川端へ着くと、薄らと月が出たよ。大川はいつもより幅が廣い、霧で茫として海見たやうだ。流の上の眞中へな、小船が一艘。——先刻こ、で木の實を賣つて居つた婦のやうな、丸い笠きた、白い女が二人乗つて、川下から流を逆に泳いで通る、漕ぐぢやねえ。底蛇と言つて、川に居る蛇が船に乗つて底を渡るだもの。船頭なんか、要るものかい、は、ん。」

と高慢な笑ひ方で、

「船からよ、白い手で招くだね。黒親仁は俺を負つて、ざぶくと流を渡つて、船に乗つた。二人の婦人は、柴に附着けて賣られたつけ、毒だ言つて川下へ流されたのが遁げて來ただね。」

すつと川上に行くと、其處等は濁らぬ。山奥の方は明い月だ。眞蒼な激い流が、白く颯と分れると、太な蛇が迎ひに來た、でないと船が、もう其の上は小蛇の力で動かんでな。底を背負つて、一廻りまはつて、船首へ、鎌首を擡げて泳ぐ、龍頭の船と言ふだよ。俺は殿様だ。……

大巖の岸へ着くと、其の鎌首で、親仁の頭をドンと敲いて、(お先へ)だつてよ、べろりと赤い舌を出して笑つて谷へ隠れた。山路はぞろくと皆、お祭禮の葎だね。坊主様も尼様も交つてよ、尼は大勢、びしよくとびしよくと濕つた所を、坊主様は、すたくと乾いた土を行く。

濕地葎、木葎、針葎、草葎、羊肚葎、白葎、やあ、一杯だ一杯だ。」

と筵の上を膝で刻んで、嬉しさうに、ニヤ／＼して、  
「初葺なんか、親孝行で、夜遊びはいたしません、指を啣へて居るだよ。……さあ、お姫様の踊  
がはじまる。」

と、首を横に掉つて手を敲いて、

「お姫様も一人ではない。侍女は千人だ。女郎蜘蛛が蛇に乗つちや、ぞろ／＼ぞろ／＼皆な衣裳  
を持つて来ると、すつと巻いて、袖を開く。裾を浮かすと、紅玉に乳が透き、緑玉に股が映る、  
金剛石に肩が輝く。薄紅い影、青い隈取り、水晶のやうな可愛い目、珊瑚の玉は唇よ。揃つて、  
すつ、はらりと、すつ、袖をば、裳をば、碧に靡かし、紫に颯と捌く、薄紅を翻す。」

笛が聞える、鼓が鳴る。ひゆうら、ひゆうら、ツテン、テン、おひやら、ひゆうい、チテン、  
テン、ひやあら／＼、トテン、テン。」

廓のしらべか、松風か、ひゆうら、ひゆうら、ツテン、テン。あらず、天狗の囃子であらう、  
本若の聲を遙に呼交す。

「唄は、やしこばの唄なんだよ、ひゆうら／＼、ツテン、テン、

やしこば、うば、

うば、うば、うば、

火を一つくれや……」

と、唄ふに連れて、囃子に連れて、少しづつ手足の科した、三個の這個山伏が、腰を入れ、肩  
を撓め、首を振つて、踊出す。太刀、斧、弓矢に似もつかず、手足のこなしは、しなやかなもの  
である。

從七位が、首を廻いて、笏を振つて、臀を廻いた。

二本の幟はた／＼と翻り、虚空を落す天狗風。

蜘蛛の圍の蟲晃々と輝いて、鏘然、珠玉の響あり。

「幾千金ですか。」

般若の山伏が恚う聞いた。其の聲の艶に媚かしいのを、神官は怪んだが、やがて三人とも假装  
を脱いで、裸にして縷無き雪の膚を顯すのを見ると、いづれも、……血色うつくしき、肌理細か  
なる婦人である。

「錢ではないよ、皆な裸に成れば一反づ、遣る。」

價を問はれた時、本若が蜘蛛の巢を指して、然う言つたからであつた。

裸體に、被いて、大旗の下を行く三人の姿は、神官の目に、實に、紅玉、碧玉、金剛石、眞珠、  
珊瑚を星の如く鑲めた羅綾の如く見えたのである。



神官は高足駄で、よろしくと成つて、鳥居を入ると、住居へ行かず、階を上つて拜殿に入つた。額の下の高麗べりの壘の隅に、人形のやうに成つて坐睡りをして居た、十四に成る緋の袴の巫女を、いきなり、引立てて、袴を脱がせ、衣を剥いだ。…此の巫女は、當年初に仕へたので、

憊うされるのが掟だと思つて自由に成つたさうである。

宮奴が仰天した、馬顔の、瘦せた、貧相な中年もので、豫て訥であつた。

「從、從、從、從七位、七位様、何、何、何、何、何事！」

笏で、ぴしやりと胸を打つて、

「退りをらうぞ。」

で、蟲の死んだ蜘蛛の巢を、巫女の頭に翳したのである。

嘗て、山神の社に奉行した時、丑の時參詣を谷へ蹴込んだり、と告つた、大權威の攝理太夫は、

これから發狂した。

——既に、廓の藝妓三人が、あるまじき、其の夜、其の怪しき假装をして内證で練つた、と云

ふのが、尋常ことではない。

十日を措かず、町内の娘が一人、白晝、素裸に成つて格子から抜けて出た。門から手招きする

奎若の、あの、寶玉の錦が欲しいのであつた。餘りの事に、これは親さへ組留められず、あれあ

れと追ふ間に、番太郎へ飛込んだ。

市の町々から、やがて、木蓮が散るやうに、幾人となく女が舞込む。

——夜、其の小屋を見ると、おなじやうな姿が、白い陽炎の如く、奎若の鼻を取巻いて居るの

であつた。

東京府規格外許可資紙規第一七三號

昭和十七年一月十九日印刷  
昭和十七年一月二十四日發行



著者

泉 鏡太郎 いづみ きやう たろう

發行者

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地  
岩波茂雄

印刷者

東京市下谷區二長町一番地  
井上源之丞

印刷所

東京市下谷區二長町一番地  
凸版印刷株式會社

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

發行所 岩波書店

電話九段(33)一八七番(4)  
振替口座東京七四四一六番  
會員番號一〇二〇三七番

配給元

東京市神田區淡路町二丁目九番地

日本出版配給株式會社

(寺島製本)

丁落・丁亂不等完全品なありまらた直接申出下さい お取替致すまじ





